WASON
HQ
1104
J74+
Mar 22
1889
No. 154

女學雜誌

一冊六錢

當府内無郵税

版權所有

各土曜日出版

明治廿二年(第百五拾四號)三月廿三日發

社説
小説家の着眼

論説
婦人の王國(其二)(平岩恒保)

批評
梅花餘香○小供の育方

叢話
春興將に酣ならんとす○舊時の怨恨○惡魔よ請ふ來れ○哲學者と看病婦○旅のはじ

佳傳
女小説家ストウ女史の傳

小説
理想の紳士第八回(月の舍しのぶ)

寄書
衣服を縫ふ貧女○閑亭梅(林甕臣)

新報
地久節の議に賛成す○「國の基」と云へる女學雜誌○女小説家と高等女學校○結婚の自由○米國女子選擧權擴張會の運動○養育院慈善會○成立學舍女子部○女子の洋行○慈善音樂會○其他數件

外報
女子大學教育會○ロシア女子農學校○女職業保護會○日本皇后陛下○アフリカ女學校○出版書目

附録
婚姻說○女子讀本○經濟學

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1104
J74+

Mar 2[illegible]
1889
No. 15[illegible]

女學雜誌

一册六錢
當府内無郵税

版權所有

各土曜日出版

明治廿二年(第百五拾四號)三月廿三日發

社説
小説家の着眼

論説
婦人の王國(其二)(平岩恒保)

批評
梅花餘香○小供の育方

叢話
春興將に酣ならんとす○舊時の怨恨○惡魔よ請ふ來れ○哲學者と看病婦○旅のはじ

佳傳
女小説家ストゥ女史の傳

小説
理想の紳士第八回(月の舍しのぶ)

寄書
衣服を縫ふ貧女○閑亭梅(林甕臣)

新報
地久節の議に賛成す○「國の基」と云へる女學雜誌○女小説家と高等女學校○結婚の自由○米國女子選擧權擴張會の運動○養育院慈善會○成立學舍女子部○女子の洋行○慈善音樂會○其他數件

外報
女子大學教育會○ロシア女子農學校○女職業保護會○日本皇后陛下○アフリカ女學校○出版書目

附録
婚姻説○女子讀本○經濟學

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 154. March 23rd, 1889.

EDITORIAL:— The Aim of the Novelists.

LEADING ARTICLES:— The Women's Kingdom. by Mr. Y. Hiraiwa.

CRITICAL NOTES:— "Baika-yoko." "How to Srain Children."

MISCELLANIES:— "Spring is Comming in Earnest." "An Old Grudge." "Devil Come." "The Philosopher and the Nurse." "Disgraces of a Journey."

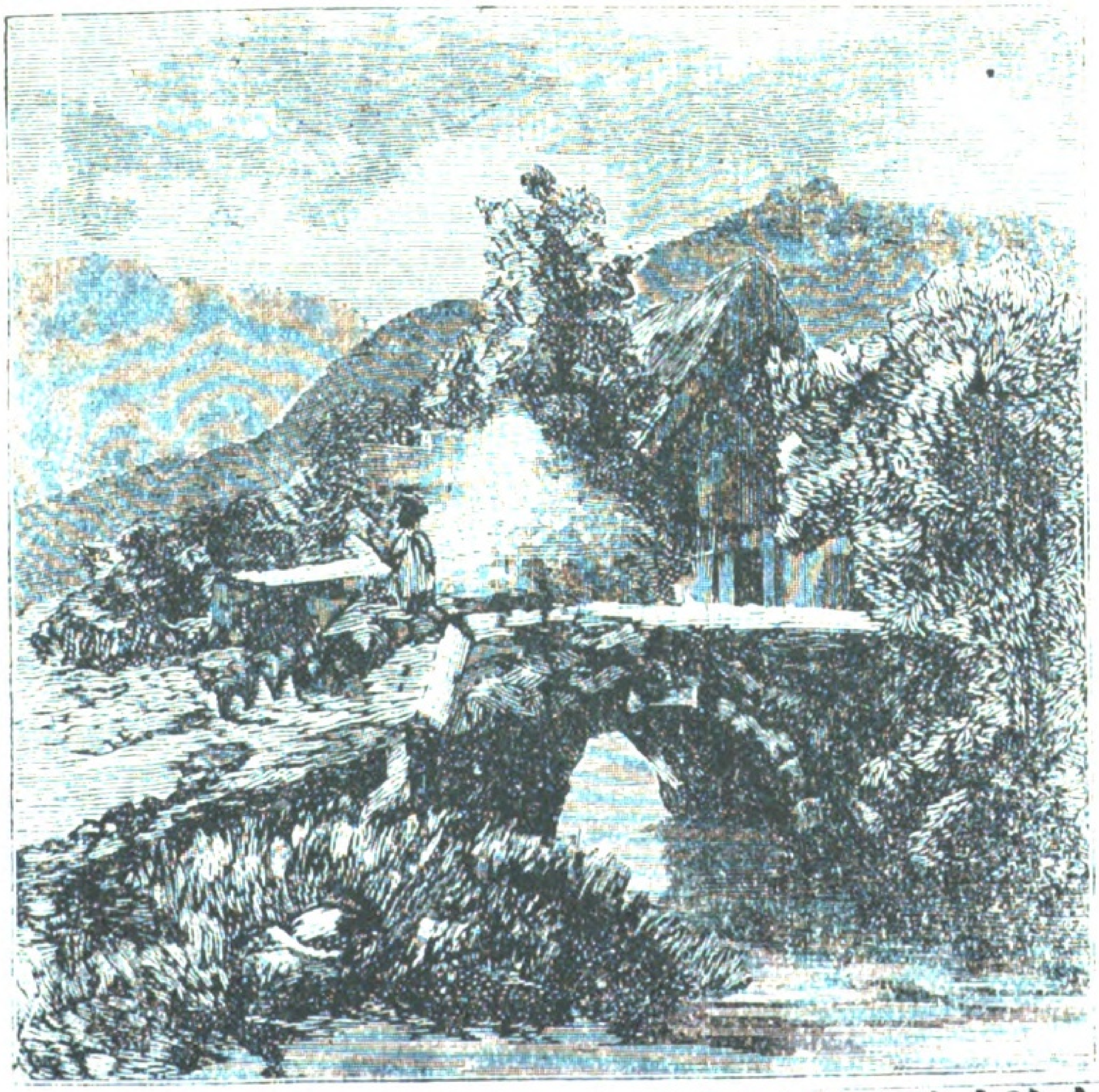
BIOGRAPHIES:— Mrs. H. B. Stowe.

NOVELS:— "The Ideal Beau."

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

女學雜誌は日本の女性を代表す、日本の女性は女學雜誌の如くあり、亦如くなるべし、亦如くならざる可らず。日本の女性を知らんと欲せば女學雜誌を見よ、之に愛せられんと欲せば女學雜誌に愛せられよ。女學雜誌は日本婦人の分身にして、亦た其の教師、案内者、相談相手たるなり。



Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百五十四號　明治二十二年三月廿三日發兌

社說

○小說家の着眼

エメルソン曰く、人は猶ほラブラドルの水晶の如し、轉々之を動かし見るに未だ何等の光澤あるを認ためず、然れとも眼乍ちにして或る一角に觸るれば深色透徹、光彩燦然として發射するを見る」と、吾人多くの人を察するに實に然り、古今の社會を通觀するに亦實に然り。

抑そも社會には大法あつて存す、古今東西に於ける文化の相違は蓋し著るしと云へども、然れども是れ亦た幼者の長じて成人となり成人の老ひて老年となれるに均し、之を達觀するに未だ甞て甚はだしき絕類の異例あるを見ざる也。然りと雖ども世人が此の社會を觀るや各個に別眼を備ふ、或は之を上より臨み來り、或は之を下より望み去る、左右前後その各の察する所ろに由りて亦固より其見る所ろを異にする者也」。日月匆々去つて復た歸らず人生の短路恰かも斷岸に向つて走るに似たり、左れば之に歎ずるものは斯の如く言ふ云く、浮世本來夢の如し功名富貴泡沫に均し須らく先づ大覺して塵肉の奴隸たると莫れと、思ふに是れ一類の見識あらん。然れども或るものは亦た如此く言へり云く、現世の果敢なきと左樣なるが故に、故に人はたゞ飽食逸居して幸福を貪ぼるを可とす、泣くものは宜しく泣くべし、然れども一滴の淚は何の効もあらざるとを記臆し、須からく快笑滿面舞ひ踊るべしと、思ふに是れ亦た一類の見識ならん。或は切りに古英雄の跡を慕ひ、琵琶を聞けば劒を拔きて躍舞し、蹄を聞きては夜中卒然として起き、胸を拊つて慷慨痛切、義膽忠魂凝つてアツパレの神洲男兒となる、其の天下を見るや號泣するが爲め也、號泣又慟哭、一日も平和あるとあらざるならん、然れども是れ亦た一の見識たるに相違なし。左れど之を見て冷笑するものもあり、談論空々として殆んど取り留めなく、肩を聳やかし戯むれて步ゆみ、啞然、猿の如くに見て一世を罵しる、彼は云く人世固より善惡進退上下貴賤あるなし、局促として軛を負ふ寧ろ牛たるに若ずと、思に是亦一類の見識たる也。而して憫むべきは彼憂鬱の子也、濁れる雲漠々として絕て天日を見ず、深夜の暗らきに生れて烏木の谷に長じ物凄きスチイクスの洞穴ぞ彼が尤も好るの住み家なれ、歎じて云く愛情は花に似たり一朝にして催く、淚は氷に似たり流るゝも昧なし、暗黑よ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

沈鬱よ、メランコリーよ、ペンセローソよ、人世の伴侶は只だ汝等のみと、如此く悲しむものも亦た並し一類の見識たる也。然るに之に反し、花をかざして歌ふ、月光清し、春色甘し、雲雀高し、家鶏鳴けり、駘蕩として天使の子は踏舞すらん、フエアリーの軍は樂を叩くらん、無心にして和樂す、世は猶ほ盡せぬ春の如しと、斯る幸福ある人々も亦た一種の見識にてある也。其他怒るもの、憂ふるもの、信ずるもの、望むもの、色に溺るゝもの、酒に醉ふもの、盗むもの、殺すもの、悉く是れそれぞれの見識に由る也。而して此等の見識を爲すものは其眼悉とく社會に向つて射、素と同一の社會を見解して如此く異樣には覺悟するなれ。嗚呼社會よ、何如に多くの過ちの汝ぢによりて爲されたる哉、柳下惠は之に由りて老父を養わんと欲し、盗跖は之に由りて金庫を開かんと欲し、マリアは之に由りて香油を塗らんと欲し、ユダは之に由りて財嚢を利せんと欲す。

而して世に學者と云へるものあり、彼は此等の現象を見て之を正當に解釋せんと欲す。別に亦た文人と云へるものあり、彼は此等の現象を見て之を正當に寫さんと欲す。此に於てかエピキウラスの如くに解くものあり、ボウロの如くに解くものあり、瞿曇氏の如くに解くものあり、ソクラットの如くに解くものあり、而して亦たリチャードソンの如くに寫すものあり、ゾラの如くに寫すものあり、ラフエレの如くに寫すものあり、尤も下等なる浮世畫師の如くに寫すものあり。

抑そも小說家は何如なる人なるぞ、彼は一方に於ては社會の講釋師あり、又一方に於ては社會の寫眞師なり、彼が求むる所ろの資格固より更らに多かるべし、然れども吾人は今ま只だ此の二資格を與へて彼の人物を評せんと思ふ。彼れ既に講釋師にして寫眞師を兼ぬるもの也、故に之を一方の高きより評するときは彼は一種の哲學者、一方の低きより評するときは彼は一種の繪かきたる也。

好し哲學者ありとも又好し繪畫きありとも、其の眼こを點ずるの方向何如によりては此の社會は亦た何如やうにも見らるゝなり、試みに畫を以て喩へん、春畫を寫すも繪たるとを失なわず、山水を寫すも繪たるとを失なわず、無上の光明を寫すも亦た同じく繪なり、然れども其の寫したるの畫面に於て畫工の着眼果して何處に存するかと云ふと、是れ畫を觀するもの丶第一に見るべき所ろたり、たゞ其の猥褻それ自らを寫したるに止まるか、たゞ光明それ自らを寫したるに止まるか、

其の山川を寫すとき畫工の脚を立てたるの地何れの點にありしか、此等の事を考へずんば決して畫工の技の高下を評す可らざるが如し、哲學者の論文を讀むときも亦然り、彼の小說家の著作を讀むときに於ては、特に尤も此の眼識を要す。

小說家の社會を觀察するや、固より其の實相を觀察するなり、故に其の之を解釋する敢て無證據の言なかるべく、其の之を寫す敢て無實形の跡なかるべし。然れども吾人は只だ其の實を觀たり實を寫せりと云ふによりて則はち彼を容す能はず、更らに彼は如何なる方向よりして之を觀之を寫せりやと問はざる可らず、切言するに更らに彼は如何ある眼識、何如なる着眼によりて之を觀之を寫せりやと問窮せざる可らず、何んとなれば此の眼識此の着眼によりて此の同一なる社會は即はち何如やうにも見られ得べければ也。

吾人は必らずしも小說を以て勸善懲惡のレクテウアありと見ず、故に小說に於て必らずしも仁義道德の講釋あるとを必要とせず、然れども只だ望む所ろは希わくは仁義道德を認ね得るの眼こを以て此の實事實相を觀し寫されんとを願ふもの也。

吾人が數年小說に付て論ずる所ろ常に如此し、故に今まに於ても亦たくりかへして如此く告白せざるを得ざる也。試みに見よ、作者が心裏に道を信ずるの道念を存せず、故に亦た不道に憤うるの勇を懷かざりしならば、又作者が心裏に自由を重んずるの精氣を存せず、故に亦た壓制に怒るの慷慨を懷かざりしならば、又作者が心裏に淸德を慕ふの純潔を存せず、故に亦た汚穢に泣くの眞實を懷かざりしならば、而して彼が信仰は薄弱に、守る所ろは優柔に、希望は只だ一時の喝采を貪ぼり、徒らに文字を弄するに在りしならば、如此き小說家が著作は果して世に何如なる決果を來すべきぞ。

讀者諸君、吾人は只だ不潔なるとを記るしたる文字を見て直ちに之を嫌ふなりと誤解する勿れ、世はすでに不潔にて滿ちたり、實を寫すものに於ては何すれぞ此の不潔を寫さゞるを得んや、たゞ之を寫すものゝ着眼何如ん、之を寫すものゝ好尙趣味何如んと云へるとぞ吾人がくれぐれも切に警告する所ろの問題なる、彼の聖書を見よ、姦淫したるものゝ記事を掲げたり、尤も卑しきの比喩をも用ひたり、左れど之を讀むものに於て誰か此の書の希望する所ろ感化する所ろの淸潔あるとを疑はんや、以て知るべし不潔文字の人を害するは其文字の不潔なるが故にあらず寧しろ其文字を支配し連絡し文字頭上

に含ませたる一種の麗思の潔ぎよさと否らざるとに關することを。吾人此に至りて今の淺薄なる小說を見る、吾が慷歎の久しからざるを得ざる所以を知る也。

彼の經國美談の如き、佳人之奇遇の如きは、精神明潔にして固より一點の汚れを存せず、吾人は之に付て喜こぶのみ敢て吾が慷歎を寄せず。然れども此等の二書は之を小說と云はんよりも寧ろ傳紀歷史とこそ云ふべけれ、吾人が今の日本の所云る小說なるものを論評するに於ては實に之を論外に置かざる可らず、其他切りに演說筆記にて滿ちたるは此れ亦た一種の政論として見るべし、餘り淡泊にむき出にしたる小說にして寧ろ之を小說として見る能はざる也。故に吾人が玆に論評するは彼の書生氣質一流の小說、近時「都の花」「新小說」等に於て揭載せらるゝの小說を云ふなり、而して今や如此き一流の小說を作るものゝ着眼果して何如んと問究する也。

吾人は二葉亭の「浮雲」を讀むとき密かに感悟したり、此れ慷慨の筆なり、嘲世の文なり、殆んど厭世に陷いれるの着眼なりと、吾人は其の着眼に服する能はず、然れども亂々たる數多の小說に比較しては其の着眼の一種脫俗したるを無みする能はざりき、其他多くの新小說を讀みたり、其の小說家の着眼する所ろ那の邊にありやと考究したり、然るに發見したるものは只だ其の「實を寫せり」と云ふに止まる、而も尤も普通なる無定見ある着眼を以て「其の實を寫せり」と云ふに止まるを見たり、蓋し吾人が眼識の鈍きなり、吾人は不幸にして埋沒せる其最深の着眼何處にあるやを發見する能はざりし也。

甞て聞く、ユーゴ、ヂスラエリ等の小說を讀めば、讀來り讀去るとき忽焉として作者の神に接す、此に於てか其の姦通の記事も其罪惡の記事も其の失望落膽の記事も悉とく此の神に融化せられて全篇の理想の躍如するを覺知すと、蓋し此れ著者着眼の非凡なるに由る也。吾人は必らずしも政治小說そのみ是なりとするにあらず、然れども著者が理想の如此く高く、其の着眼の如此き方向にあらんとを切望せざるを得ず。

或人の云く、我國には未だ小說家なるもの少なし、其の多くは倘ほ物語（ストーリー）の作者なりと、吾人若し大膽に評し得べくんば或は然らんとこそ云はんなん、然れども假令ひ物語に於ても倘着眼理想の高尙を望まざる可らず、嗚呼堂々たる新日本の小說家諸君、諸君は何に憤うりて筆を揮ふか、何を信じて筆を揮か、抑も何を望て筆を揮か、諸君が胸中に万斛の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

慷慨ありや、果して萬丈の氣焰ありや、抑そも亦た萬天の理想ありや、今や日本の社界は洸々として燃騰混溶せり、諸君は其の何如なる點に於て之を察、何如なる方向に向つて之を形ち造らんと思ふか、日本の社會固より大ひに優れる所ろあらざるべし、左れど其の或る一角より之を觀徹せば亦固より燦然たる光彩なきにしもあらざるべし、嗚呼着眼なる哉〱、吾人は今の小說家に於て先づ此の光彩を看破するの着眼あらんとを尤も切に祈禱するもの也。

論說

○婦人の王國（其二）

平岩愃保述

婦人の力の重きと、婦人の位置の大切なるとを知つて然る後婦人に對する取扱が變ると云ふのではなく、其外に最も大に人の心を動かす者があつたに相違ないと思ひます、其證據には西洋婦人には、斯う云ふエライ人がある、西洋婦人は、斯う云ふ遊びをして居るから、日本の婦人も是をしなければならん、西洋では婦人を斯う取扱ふ故に日本も矢張そう取扱ねばあるまいと云ふ樣なとが、中々日本には大勢力のある說でありませぬか。ソコデ茲に大に注意しなければならんと思ふとは、西洋の婦人の爲るとは何も彼も皆善いと誤り信ずる者は幸にして今日は少くなつて貴娘方迚も左樣に御承知ではあるまいと思ふ、西洋婦人もア、云ふ風の働きを爲るから矢張り日本婦人もア、云ふ事業を爲したいと云ふ樣に、一から十迄西洋婦人のとさへ云へば皆宜しいとであるとは貴娘方も思召しますまいし、又貴孃方に教ゆる處の先生もソウは御教へなさらぬであらうと思ふが、凡そ物が來る時は惡るいとも善きとも其分別を辨へずに是を採り用ゆる者であるから、今私が思ふ處を演ぶる前に何故に西洋に於て婦人の勢力を重んずる樣になつて來たか、何故に婦人の働きが社會に出る樣に成つて來たかと云ふとに付き、聊か愚見を御咄し申し度と思ひます。

歐羅巴のとは私は知らない、唯書物や新聞若しくは人の噂さに聞いた計りであるが、彼の亞米利加の有樣に就て申せば、亞米利加では何うしても婦人の權が盛にならねばならず、働きが盛にならなければならんと云ふ事情がある、尤も基督教の敎化もあり、又人が道理を悟つて婦人は斯る性質の者であるから男子との關係は斯く〱の者であると、深く理を究めたるともあるに相違ありますまい、併しながら外の事情に迫ま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

られて斯る場合に進み至つたることが、餘程大部を占めて居る樣に見えます。夫れハ何かと云へば先づ人口です、亞米利加の人口三分の二ハ婦人で、三分の一ハ男子であると云ふても宜しい、婦人の多きことハ實に驚く可き程で、先づ會堂に往く人の種類を見ますると、何時でも過半數は婦人である、婦人が半分より少ないと云ふ樣なことハ如何なる會堂に行きてもありません、大抵半分以上若しくハ三分の二以上を占めて居ることハ少しも珍らしきことでもない、更に又政談の演說會に往きて見ると、日本杯でハ婦人ハ大抵十人以下であるが、亞米利加でハ婦人が餘程に多い、私が曾て新約克の中央劇場に政談がありましたから往つて見ますると、半分ハ婦人で詰めて居る、斯の如くに婦人の數が多くて男子との平均を得て居らない故に婦人ハ男子に依らずして一己の生計を立てなければならぬと云ふ必要が起るのです、生存競爭と學者の申すハ誠に實際のことで婦人とても男子と同樣ふ生活し衣食して往かなければならぬ、夫にハ仕事を見附なければならんと云ふ處からして、如何にかして無理ながらも働き場所を見出さなければあらぬ、給金も男子よりハ安くして之と競爭せねばあらぬ、之を用ゐる人も亦男子よりハ給金安くして且能く事に堪ゆれば女子を使ふに若かず、其處で小學校敎員は勿論市街を通行する如何なる店でも、店頭に止まつて見ると是を賣つて居る者は大抵は婦人です、電信局に往つて見ても婦人の技手が澤山にある、又簿記を使つて居る處は大抵は婦人と云ふても宜しい、斯く婦人は商店に多く、會社に多く、時には大學校の或る役人若しくは書籍係りの如き者に用ゐられて居ることは吾輩日本人の驚く計りの有樣である。斯く婦人も男子も同じ樣に働かなければならぬ事である、其働きと申すことが勢力の存する處で勢力の有る者は自然に尊ばるゝ樣になる、故に婦人が出てゝ敎師となると云ふには、當に成るべきの必要がありて敎師となり、敎師と成つて働くにも又勢力があると云ふことになるのです。夫計りではない男子との數が已に不平均だから如何なる婦人でも皆人の家に嫁する譯には往かない、且又日本の樣に誰が世話をするとか、媒妁をするとかして嫁を貰うのでなく、相互の好みに依つて婚禮することであるから、若し男子に好まれぬ人があれば終身嫁に往くことはならず、數の方からも前に申した通り依て獨身で居らなければならぬ者が多く生ず、此れ亞米利加には老處女と云ふ者が澤山にある譯です。於是婦人と生れたる者は婚禮が一生の大眼目ではない

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

外に最少し高尚なる目的があると云ふ樣な理屈が起つて來なければならぬ、其邊からして吾は學問を世間に賣つて働きをなすとか、或は外國に傳道師と爲つて往くとか、或は禁酒會の爲に働き、矯風會の爲に貧民濟度の爲めに力を盡すと云ふ樣に慈善的のヿも總べて婦人よりして出ると云ふ樣になる。夫故に西洋に於て若し婦人が悉く手を引たならば、教會の働きなどは餘程退歩するに相違ない、慈善の事業は半分以上は退歩するに相違ない、夫故に社會よりも餘程に重んぜらるゝのみならず、婦人自らも其身を高尚にし其働きを盛にするに演說壇上にも登らなければならぬ多くの集まれる人を卒ひて先導を仕なければならない、結局社會に出て種々の働きを仕なければならぬと云ふ樣になつて來る。是は唯前に顯はれて居る事情よりして申したのだが、夫れだけの事情も元々多少天理に適つた事がなければ其處迄勢力を及ぼすヿが出來ないと云ふヿは明の咄してある、夫れ神の前に在つて婦人は男子より卑しいと云ふヿはない、男子は婦人を奴隷の如くに使役して宜しいと云ふヿは惡るいに相違ない、何處迄も同等に何れを尊とみ何れを卑しとするヿは出來ないに相違ない、若し男子が世の中に生活して往かなければならぬと云ふ道理があらば、女子も亦生活しつゝ往く可き道理がある、男子にして幸福を得なければならぬならば、女子も亦幸福を得なければならぬから、右の如き事情あらば是非共右の如き有樣に陷らしむるは無理ではありませぬ。併しながら日本の婦人吾々姉妹の社會に取つては餘程考を費さなければならぬヿゝ思ひます、何ぜと云へば今日本で女子を教育する、又社會に立つて交際家とならしむる樣、慈善の業に從事せしむる樣、傳道の事業に働かしむる樣、公けの事業に熱心せしむる樣、全身の勢力を盡さなければならぬと云ふ樣な傾きに成つて來ると、大きに困ると思ふ。

日本では女子を教育するに、第一に家庭を宰どるヿを充分に教へなければならんと思ふ、家の主人となるに大切なるは其キリモリ賢こく家を統御するには、純粹に高尚に人をして感服せしむる樣な者でなければならん、則ち一言を以て是を盡くせば良妻賢母となるべきヿを教ゆるが大切であると思ふ、否らざれば日本の事情に合はぬ樣な御轉婆者が出て來るのです、夫故私は婦人の王國とは何處に在るかと云へば、則ち家に在ると思ふ、家が婦人の王國であるのです。

私が家と云ふのは英語のホームと云ふ意味で、從來家と云ふ

ものよりハ餘程廣く高尚なものです、又家が婦人の王國と申した處が、婦人ハ社會に出て公けの仕事に働くなと申すのではない。基督の王國ハ此世の王國とハ違うと云ふとハ聖書の中にも述べてあり、基督の王國ハ心の中に在るので、世の中の王國ハ誰人の眼にも見ゆるが、基督の王國ハ精神を支配するので肉眼でハ迚も見へざる者であると云ふた、然るに基督を信ずる者ハ天國の支配に屬するから、俗世界にハ干渉しない働らかないと云へば大なる間違いで、基督の王國ハ心の中にあるものだから營業者にも及ぼす處の者である、併し其王國たる政事社會が目的でハなく、交際社會が目的でハない、是を支配するハ一に心であるのです。是れと同じく婦人の王國ハ家である、家が目的で家を治めるとが出來る樣にするのが、婦人が婦人として此世に存在する目的である、演說するとが出來る人なれば演說をするも宜しい、婦人にして法律を學び充分に裁判官とある技量ある人なれば、私ハ强て袂を提へて其地位を下れとは言ハない、米國のミス、ウイラルドの如き大統領になると云ふ心のある人があれば隨分爲るのも宜しい、併し婦人が皆其本領を去り、交際社會に立つ樣、敎育社會、政事社會に立ちて、家を離れる樣にあつては大いなる間違である。若し日本の婦人にして斯の如き間違があるとすれば、今女權が隆んになつて婦人が自由になつて來ると云ふも亞米利加風に吹かれ熱に浮かされて居て、自分の家を作る考もなく、子を育てるとも、夫を佐ける道も考へずに居るなれば、大層なる間違と云はなければならん。(未完)

批評

○梅花餘香

「梅花餘香」は大坂梅花女學校內の與文會より出版せらるゝものにて、本月十三日其の第一號を發兌せられたり。蓋し與文會とは右梅花女學校生徒方の文學會にして、此の文學會員が論說し著譯せられたるものを此の雜誌に編輯さるゝなり。一冊四十四頁、躰裁の啻に梅花に似たるのみならず、載する所ろの文章極めて暗香に富り、其の會說の末に云く、

吾等は上帝より此の榮寵を特に女子に授けられたるものと堅信するが故に、謹んで此の恩命を拜し、誓つて平和の改革を起さん爲め、茲に與文會なるものを設け、文學を攻究して將來運動の準備を爲さんと欲す。吾等は野外の一梅樹其花其香固より芳冽ならずと雖ども、深く感ずる所ろあつて僭越を顧みず、敢て百花の魁に魁け、千紫萬紅の芳辰を企望するもの也。

志ざす所ろ美なりと云ふべし。抑そも吾人は兼てより各女學校に一ツの文學會あらんとを希望するもの也、故に此の文學

會の文章論説を集めたる雜誌の出でんとを希望する尤も切なりし、然るに此の興文會は先づ多くの女學校文學會に先ちて早くも毎月刊行の雜誌を出版せらるゝに至れり、吾人が喜こび實に知るべき也。故に吾人は他の多くの文學會に勸告を寄せんが爲め、右「梅花餘香」に載せられたる編者が一書を左に轉載すべし、

　興文會長望月興三郎氏に寄するの書

拜啓兼て承り居候御校興文會に於て、今度英和文學上の雜誌を發兌せられ候由、實に結搆の事と存じ候、從來の經驗に據るに、學校内に文學會樣の者を設くるは、喩へば稽古場に仕合を置くの類にて、之に由り平素諸生が修業したるものゝ發揮して、恰かも生ちを得たる樣に相成ると驚くべき程と存じ居候、然るに此の文學會に於て發揮するものを更に公けにするは、いよ〳〵以て此の生ちを活潑にするに當り、只だ同士の前に於て仕合するのみならず、極めて華々しき見物の前に於て仕合するの心地せられて、之れに由り諸生を奬勵すると、尤も切ならんと存じ候、御會に於て即今此の御計畫あるは、即はち御校の書生をして、之よりいよ〳〵活潑に生ちあらしむるの御處置と思はれ、轉た欣賀の至りに候、抑も女性が公事に盡力するの方、固より數多有之候中にも、文章を以て社會を益するは、何よりも適當多益ならんと考へ候、身は好し茅屋の裏に在りて、深夜暗燈の下に、緑兒に乳を含ませ乍らも、其の不義を惡み、純潔を慕ひ、貧苦なるものを憫れみ、不幸薄命あるものに泣くの道念感想に腸を搾りたらん時、若し平生に學ぶ所あらんには、直ちに之を筆にして、世の仁人義士に訴ふるとを得べし、則ち密室に隱れ數万の文字を賴み、身は門を出でずして、能く天下を動かすと、文筆の功の外に多く無之るべく、即ち是れ女性の生涯に於ての、尤も適當尤も多益なる世に盡すの方なるべしと信じ候、况んや今日世上には、彌よ女秀才の現はるゝ兆し甚だ多かるに、其の女秀才の過半は大抵小説を著作するとに狂奔し、而も其の小説は、必らずしも悉く淸潔高尚なるものにあらざるの實况なれば、此際道を信ずるの女學生亦多く出現し、其著作する所に依りて、文學界の空氣を淸くせんとぞ、當今に尤も切望すべきことゝ思はれ候、左れば基督敎に據て立られたる御校の御會に於て、今度左樣の文學雜誌發兌せられ候事は、一つには御校の書生諸子を勸奬すると淺かるまじくと信じ、二

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つには其の發揚する所によりて世を益すること甚だ深かるべしと信じ、弟亦た誠實に此擧を祝するものに候、左れば將さに出版あらんとする該雜誌が初めより必ずしも名文を以て滿ちず、必らずしも卓論を以て滿ちずとは云へども、必ずや初めより高尚淸潔の文章を以て滿々すべしとは、今より確信して疑はざる所に候、之を以て其の發兌せらるゝとの一日も早く、此の不潔なる日本文學會を淸むるとの亦一日も早かれよとは、弟が眞誠に熱望する所の本念にて候、初號の御編集に對し、何か一文を草せよとの御命に候へども、目下特更らに忙雜にて、貴意に從ふの榮を得がたく候まゝ、只だ御校御會員に對する希望と信仰とを記るして且つ此會を祝し、之を學兄に依りて諸君に申上度存じ候迄に如此に御座候早々不一

二月十八日　巖本善治

願くは各女學校に一つの文學會あれ、而して此の各文學會に於て一の雜誌を發兌し得るに至れ。

(88) 小供の育方　一册中本百三十八頁定價卅錢　發兌所東京本町三丁目金港堂

此書は土居辨二郎氏の著作にて、第一章(總論)、第二章(育方は父母親らすべし)、第三章(身躰の育方)、第四章(智慧の育方)、第五章(行の育方)、第六章(就學の心得)、に分ち小供の智德躰の敎育法を極めて平易簡畧に說明したるもの也。論理は主もスペンサーの敎育論に據りたる如くなれども素より增減したる少なからず、故に其の甚だ深切なる敎戒も加わり居る代りに、亦た尤も必要なる條目を畧したる所ろあり。例せば、第三章躰の育て方の部に灸の事を說きて、

子供は皮膚の痛み抔に感ずるとは殊に甚だしく、今ま少しの血液が指の先より出るも大聲を發して泣き叫び、一寸と針が立つもこれに苦しみ其の感動は大人などの考の及ばざる程甚はだしきものなり。然るに灸は皮膚に火を點して之を燒くことゆへ其の痛みは指の先に血液の出て又一寸と針の立ちたる類にあらず、子供に取りては余程苦しきことなり、……之を無理無躰に施こすときは子供の心を感動すること譬へ方なきほどにて、心を害するは勿論隨がひて身躰を害することも量る可らず、されば愼しみて子供に灸をなすことを止むべし、灸をなさずとも外に發生の折檻の仕方は澤山ある也。

如此き一節は實際にして特に價いあるもの也、而して智慧の敎へ方に只だ五官の働らかせ方を說きて其次を說かず而も切

りに記臆修練の事を說ける如き、行ひの敎へ方に愛情自重の情物事に怖るゝの情威勢を好むの情怒る情仕事を樂しむの情等の制し方伸し方を敎ゆれども尤も大切なる正否善惡の觀念を養ふの道を說かず又尤も大切なる愛育の秘决を說かざる如き、寧ろ欠點とも云ふべきか。

然るに其の總論の冒頭に云く、

鳥を飼ふことを好める人の集まるときは其話し必らず鳥の飼ひ方に及び、牛の子を育つるとを職業となす人々の集まるときは其話必らず牛の子の育て方に移り、又植木を業とする人々の集まるときは其の植付方より育て方のことを互ひに話し合ふを常とす、然るに子を持つ親々の寄り集まることあるも我が子の育て方を互ひに話し合ふものは誠とに少なし。

是れ實に適切なる文字と云ふべし、育兒方の書にして近頃出版せられたるものゝ中には此の書の如きは必らず第一流中に列すべきもの也。

スペンセル曰く子供は野蠻時代の景况を展發しつゝあるものなれば之に完全なる品行を要むるは固より不可なり又智の早熟するを不可とする如く德性も餘りに早く熟するは可ならず又子供をして自由ならしむるは勿論なれども人民が社會に於て進化せし如く初めは之を束縛し后には漸々に之を自由にすべし。

叢話

○春興將に酣ならんとす

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ嗚呼人間もし慷慨する所ろなくば春は何如にぞ長閑からん、文字を知れるの智識を棄て、國家を思ふの自任を棄て、天下を憂ふるの大望を棄て、只だ罪なきとと健全なるとを無上の友とし、富貴を知らざるとを最良の伴侶とし、悠々として若し自適するとを得ば春は何如にぞ長閑からん、吾れ未だ春を見ず、然れども天地は緩みたり、空氣は落附たり、四方自づから馥郁たり、梅花は先づ叫んで春來れりと告げぬ、桃花は盛んに笑つて春來れりと告げぬ、而して今や櫻も亦た漸やくに滿開せんとは音信るゝなり、春の將に來らんとするや吾は「今年こそ」と待構ふ、左れど春來りて暖漸やく生ずるを覺り、客を送つて門を出れば花巳に謝しぬ、嗚呼年々歲々花は常に開らくあり、然れども歲々年々花を見て暮らす時はなし、天請ふ吾に一日の愬を與へよ、特に此の尤も忙絕なる當年に於て與へよ、春興將に酣ならんとす、必らずしも今日も暇われよとは、願はず、只願はくは春天一時の別情を賜へ、春宵一刻直千金。花有二清香一月有レ陰。　歌管樓台

人寂々。　鞦韆院落夜沈々。
天よ、然れども吾は徒らに無事の客たるを願はず。

○舊時の怨恨　老人日記の一節　是空子

夫から漸やく陸に上つたが、今から考へて見ると丁度北海道であつたよ。差當り天幕を張つたが何分に狹いから銘々穴を掘つて中に這入つた、隨分寒かつた。特に夜に爲ると益々寒く實に堪へられんから、家來に言附けてドン／＼と火を燒かせた。夜中ごろに成つても己はどうも眠られんから大聲で歌を謠つた、例の得意の美音だから皆々目を開けて見たやうだが、其の賞める聲が大層かすかに聞えた、ハテ不思議と思ふ中に段々と其聲が聞えぬ樣に成つたが、火の光りで見れば確かに口を開いて何かシヤベツテ居る、いよ／＼不審だから己は大音聲で問ふた、が向ふの者も胸を張裂いて返辭したやうだが少しも聞えない。己も忌々しいシ、何か惡ジヤレをするのだと思ふてモウ默つて仕舞つた、先づ煙草でもと思ふて火の傍に寄つて吸つけると、之は何如に火は燃上つたまゝで氷つて居た、彼此するうち己の兩足迄が地に固着そうだから急いで元の穴に歸つた。

お祖父さん、それジヤ大へん寒かつたらうネ。

イヽエ、着物がお前鎧の樣に氷つてるのだから少しも寒さが通らなかつたよ。

ア、ソウ。

其處で考がへたのに、ハテナ此は己の聲が氷つてあちら迄で聞えないのだナ、それではよし／＼、平日の思ひを存分に獨りで喋舌ませうと考がへて、己もいろ／＼と獨り言を言ふた。スルトあちらでも此方でも皆な同じ思ひで、てん手に人に聞えぬと思つて勝手方躰の言を言ふた、中には惡口もした、不平もならした、聞くに堪へぬ讒訴もしたと云ふとだ。翌朝に成つて、己の名を大聲で呼ぶものがあつた、サテコソ眠つたかと、思つて驚ろいて目を醒すと誰も居ない、皆な眠つて居るやうだ。スルト又己の惡口を切りに言ふから「何を」と怒つて飛び出て見ると何處からとも知れず聲が飛で來たのだ。暫らくすると、嗚呼あの野郎は何だとか、此の男は此うだとか、酒が飮たいとか、餅が善とか、此間は何如であつたとか、それは／＼喧ましい大聲で、皆の者はビツクリして目を醒したが、之を聞いて何更らビツクリした。其時家來の鈍太は何を思つたのか、走り廻つて騷いだが、行なり火の固まりに觸ると火はトロ／＼と溶けて急に燃え上つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

た、あわてゝ逃げる時、衣物に着いた五つ六の塊まりがまた〳〵溶け出して燃え上つた、火の子は落花の如くに散た。夫で己は皆の者に斯う相談した、諸君よ諸君、今ま聞まする斯く八釜しい小言は悉とく是互に聞えぬと思ふての述懐で、言はゞ氣を知り合はぬ暗やみの時の惡口であるから、斯く白晝と成つた今日お互ひに聞くべきものでありません、夫故諸君と共に一齊に耳を塞ぎ、之より四五町かけ足で走り、此な喧嘩を聞ますまいと云ふた、スルト皆なが手を叩いたが、丸で喧嘩の最中に仲直りをしたやうであつた。

一、二、三、で走り出して四五町來て耳を開けた。時に霹靂の如き獅子の聲が聞えた、又ビックリして走り出すと途中に死んだ獅子が横わつて居たが、大方此れの聲が溶けたのであつたらうと思ふた。

お祖父さん、坊等も一度そんな所へ行つて見たいよウ。

ナニお前たちも大きくあつて、國會と云ふものが開ける比に成ると其樣お經驗が出來ます。

○惡魔よ、請ふ來れ　かすみ

昔し或る人に惡魔がつきたり、何如にすとも立ち出でざりし、某と云ふ聖人叱して曰く惡魔出でよ、と惡魔腹の中より冷嘲して曰く決して出づべきの理由なし、聖人いよ〳〵叱して之を威す、惡魔漸やく懼れて云ふ、然らば何人か代りに侵すべきの人を許されよ余は其人につきて此の者を見棄つべし。聖人云くよし、然らば代りの人を與ふべし汝ち速かに出づべし、惡魔將に出んとして問ふ然らば何人に入らん乎、聖人云く請ふ余が胸中に入れ。

○哲學者と看病婦　もみぢ

天地いよ〳〵廣く、人世ます〳〵漠たり、嗚呼我は是れ宇宙間の何如なるものぞ、我をして汝と共に辨ぜしめよ、汝我に勝ち我汝に勝たず汝果して是なるか我果して非なるか其れ或は是なるか其れ或は非あるか其倶に是にして倶に非なるか我と汝と與に知る能はざる也、吾れ誰にか之を正さしめん、汝に同じきものをして之を正さしめんか既に汝に同じ惡んぞ能く之を正さん、我に同きものをして之を正さしめんか既に我に同じ惡んぞ能く之を正さん、我と汝とに異る者をして之を正さしめんか既に我と汝とに異なり惡んぞ能く之を正さん、我と汝とに同きものをして之を正さしめんか既に我と汝とに同じ安んぞ能く之を正さん、然れば我と汝と人と與に相ひ知る能わず。人世ます〳〵暗し、天地いよ〳〵茫々たり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

茲に病めるもの號泣して苦しめり、富貴も彼を助けがたく、利達も彼を慰さめがたし、彼は只だ親切なる愛と同情とを要むるなり、想ひ起す春宵の樂しき宴樂も、錦繡を着て花下に美を競ひしとも、一篇の文章天下の佳人才子を悩殺したるとも、今は最早吾が苦しみに効なし、願ふらくは只だ吾が苦しみを苦しみとし、之を同感して吾が苦痛の半ばを思ひ呉れよ、願はくは軟らかき手、慰さむる顔、眞實なる介抱のあれよかし。

病めるもの益々苦しみて號泣す、淸き看護婦は身を裂るゝ如くに感じ、助くるなり。哲學者冷然として諭して云く、病は是れ死を警ましむる神の聲なり、もし之なくば汝ぢ卒然として頓かに死せざる可らず、病は是れ衞生身理の導き手なり、之あるによりて人は益す健全に趣むく、君乞ふ安んぜよ君が病は君を利し又天下を利するなれど。然れども病めるもの白眼苦相ます〳〵號泣す、看護の婦人涙を垂れて靜かに之を撫で、顧みて云ふ、哲學者よ乞ふ之を見よ。

○旅のはぢ　（上）

むらさき　戯稿

或る女學校の敎員より左の如き草稿を見せられぬ、一讀するに中々當れる節もある如し「旅のはぢ」は書ずてなりとの事なれども、夫は惜からうと言つて遂に掲げぬ。（編者白）

一刻千金の春日今は最中です、大宮の御園、賤が伏屋の庭面、はや既に千紫万紅を綾りました……事物が何となく陽氣です……そして目に觸るゝものが美……しかし此の美がどうも……靑苔の間に暗香を放つ春蘭、淡粧自から高節を保つのすみれ、粉黛人を迷すの薔薇……美ですしかし又た其群のうちには憐れをば知らぬ樣なる鬼薊もあります、情の心も絶へはてゝ我儘がほなる藪枯草も生ひ茂ります。これを刈り取る者は誰れでしよう、噫其人は眞に世中の缺なき美を造る者で……花の恩人です……眞の花の……めづらしき花の。

春の花にもたぐふ可き、十七八の女の子……いえ〳〵よく見ると、十五六でしよう顔の造りは大人びて居ますがその樣子に何となくあどけない所が見へます、春の花たぐふ可きほどですもの色白で眼元に計りされぬほどの愛敬と云ふ僻者が威張りかへつて居マス眉と齒と唇と眼中の樣躰……肝心の處です……しかし生人形の口上云ひのやうですから儉約に極ひつ結めて申せば尋常でやさしひと申すの外はありません。

左の手に小包を以て右の手に蝙蝠傘……例の通り頭は束髮です歩みようが妙デス二十歩ほどは少しく穩ですが、だん〳〵

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と早くなります……かと思へば急に思出したように氣を付るように小股に靜になります……どーしても何處かの女學校の生徒らしく見へますそうでもなくばあの歩み方……よう〳〵近頃女禮でも教はつたようでず……そしてあの樣子が……

彼の女は赤坂御門を出て五六丁左の方へ行きました氷川明神の近きあたりにある一寸とした小奇麗な格子戸のはまつて居る家の前に行くと急ひで通り拔けましたが五六軒行くとフト立とまり後ろを見てにつこり……何故いそひで通り拔けたかなぜ止つたか笑たか……意味がさつぱり分りません。やがて亦後へそつと立もどり格子戸の中を覗ひて嬉しそうに肩を聳へさせやがて惜しさうに戶を明ける音に內より先ず第一に大聲を立てゝの御出迎ひは手飼の狆です……內より。どなた。の音と共に出立ずる入障子打明け見上る娘。

おつかさん唯今。

實に"Word that makes the home,"

オヤ〳〵よく御歸りだ跡をしめないかチー……あの歩るいて來たのかへ。

叱る內にも亦愛惜いたわる心は十分に見へます、娘は裾に狂ひまわる狆をかきいだき母の後へに從て緣側の方へ步み出で庭の方を見渡して急に思ひ出したように、

おつかさん前の土曜日に來ようと思て居たら學校に演說があつて來られなかつたんですがそのうちにもう庭の梅は散てしまつたのねー。

口惜さうに怨めしさうに狹い庭に瘦せきつてる紅梅を見て狆を抱き手先に不知力が入りましよう。

何と云ふとだねー、歸りさう〳〵あいさつもせずに、行儀のわるい。

でも……唯今御機嫌よう……あの義雄は何處へ行きました。

あー先刻御友達と氷川へ行くと云て出て行つたがもう歸るだろう……そして相變らず御勉强かへ……此間は向島へとか行たさうだがさぞ面白かつたろーねー、あの皆さんもいらしつたのかへ。

ゑー、あの日はちようど……そー〳〵木曜日で嫌な裁縫が御休みでして皆さんと行たんですが歸りにもーくたびれて〳〵學校へかへつてからほんとに足が拔けるかと思ふでした。

思わず口へ出した裁縫……嫌など云ふ形容辭が……學校での

日頃の口僻我れ知らず顯れ出たのに氣も付かず、そして歸りには雨が降て來たもんですから、あの黃八丈の羽織をだいなしにしてしまつたの…ほんとーに面白かつたような苦しかつたような家へ歸た方がよかつたかも知らなかつたの。

おや〳〵そーかへ…御前なぜあの黃八丈の方を着て行つたのだえ…あれは薄綿でそしても一昔からちよく〳〵着におしといつてこないだ仕立さして上たのだーね御前がそれも仕立る方がいーと思たのだけれど譯が忙がしひとか下讀だとか御云ひだから、こつちで仕立さしたのです…そして別に捧縞の御召縮緬の方をわざ〳〵御前が裁縫の上るようにと思ふから縫はずに持たしてあげたのに…あれはまだ仕立ぬのかへ…そして何の事です嫌お裁縫が御休だとは。

飛でもない事を口走たと云ふ樣子しかし正直な娘です、

御かさんあれは半分ばかり出來ているのですが…外の事が忙しいと裁縫なんぞは何だかむだなようで。そのうちに早く會話の暗誦でもしたいの…本當にこまります。私ばかりではないんですもの皆さんがそーですよ…學校に居ると裁縫もいやデスが或る方は洋書が大嫌ひね或る方は算術がおきらい。しかし大抵の方が算術はいやだとおつしやるの…そして答が出ない時などはも一度して見ようと云ふ氣にどーしても成れないんですもの…私始め皆さんの一生懸命なのは英學ばかりデスそーですから始終先生が考を練る爲めに算術をしなければいけない亦た裁縫は家に居る時に使へて置かねばならない事だと御しやるんですが…つい〳〵けないのそして…

言ひ續ぐ可き語勢を母は開て橫取りをしました

まーあきれた物だね。

時に表より勢よく飛込み來りし一童子、

美ちやん御歸り。

佳傳

○女小說家ストウ女史の傳

米國にてオンクルトムスケービンと云へる高潔の小說を著わし、大に非奴隸の輿論を動かして遂に此の惡むべき制度を全癈せしめたる、女小說家ハリエツト、ビーチヤー、ストウ女史の傳記は、女流の小說家踵々として出する今の日本社會に於て甚はだ價ある教さなるべし。然るに「梅花余香」第一冊にボルトン女史の編に係る右傳記を譯述したるものあり、文字淸く且つ有力なるが故に則はち左に轉載して本誌の讀者諸君に示すと云ふ、

女史は一千八百十一年六月十四日北米合衆國カンチクチカツト州リツトフヒールド邑に於て誕生す、時に其家には十一才を長として、渾て六人の小兒ありける。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

父ライマン、ビーチャーは高名なる說教者にして、母ロザナも亦衆に超へたる美德を備ふる婦人なりき、ビーチャー氏が受る所の俸給へ、肯て薄きに非ずと雖ども、全家數口悉く一父の力を仰ぐを以て、子女の總を學校に送り、教育の途に就かしむるの資力に乏しければ、夫人自ら之が教師となり、家庭に於て學科を教授するの傍、佛語繪學及縫箔をも兼ね授け、巧みに彼等を教育せしかば、彼等は其智德の日を逐ふて發達すると俱に、又益々母を敬愛するの心を增せり。

當時女史は學業の餘暇に於て、時々牧場を散步し、或ハ森林に徜徉して、草花を摘み又果實を拾ひ、後日人に語り、「吾ハ最初にリッチフヒールドの清麗な美なる天景に依て教育せられたり」と云ひし如く、悠々自適の間に日月を送れり。

女史の齡漸く五歲に達せし時、忽ち病魔襲ひ來りて、幸福なる家運を傷害したるは實に悲むべき狀況なりき、但見る八人の小兒は慈母の病床を繞て、或は慟哭し或は嗚咽して休まざるとき、母は徐ろに彼等に向ひ「天津御神ハ吾に代りて能く汝等を撫育て給へば、專ら之に倚り賴むべし」又六人の男子へ「汝等福音の役者と爲れ」云々と遺言す、而して心緒萬端亂れて麻の如くなる夫は手に聖書を取りて、氣息一縷今將さに絕へんとする妻に向ひ「汝は今シオンの山、活る神の都、天のエルサレム、天使の群る處、生命の書に記されたる初子の集る處に赴き、天地の大判主たる神と、新約の中保者たるイエスの前に到るべし」と讀み聽かせしとき、夫人は莞爾と笑を含み夫の面を仰ぎ視て、遂に瞑目せり、其笑顏はビーチャー氏臨終の日に至る迄、鮮かに腦裏に印して忘るゝ能はざりしとぞ。

女史は其母を喪ひしより、暫く叔母の許に移り、父の後妻を迎ふるに及んで再び家に歸れり、初の程は繼母と相和せざりしも日を逐ふて親愛の情を加へ、畢に生母も啻ならざるに至れり。

女史七才の頃已に强記の性を顯はし、二十七篇の頌歌と、聖書の長文二章を諳んじ、稍く讀書を好みたれども、父は特に清廉なる牧師なるを以て、小兒を娛ましむべき藏書に乏しかりしが、偶々書齋を搜索してドン、キーホーテーの斷篇を見出して日夜之を愛讀せり、後又アイヴァンホー（和譯を梅蕾余薰と稱す）を得て兄ジョージと俱に七回迄之を熟讀せしとぞ。

十二才の時有名なる教育家ジヤン、ピー、ブレース氏の學校に入り大に文才を暢發す、年末閉校の慣例に從ひ、生徒の父母等各々其子女の成績を見んとて皆集り來りし時、女史は靈魂の不滅は萬有の光明に依て證せらるべきやてふ題にて、一篇の文章を朗讀せしに、ビーチャー氏之を聞き其傍なるブレース氏に彼の文章は誰の作なるやと問ひ、是れ君家の令嬢の手に出でたるものなりとの返答を得しとき、氏の喜悅驚歎せると一方ならざりしと云ふ、嗚呼彼の高才卓識なるビーチャー氏をして斯の如く嘆美せしめたる幼女の技倆は實に絕倫なりと謂ふべし。

姉キヤサリンはエール大學の教授フヒシヤー氏と偕老の契を結ぶの約ありしが、不幸にもフヒシヤー氏は歐洲巡遊の歸途暴風中船を破壞するに遇ひ、遂に黃泉の客となりし故、キヤサリンの失望言ん方なかりけるが、斯くて果つべきに非ずとて、氣力を勵まして亡夫の好める數學を修め、又エドワード兄に就てラチン語を學び、女子を教育するは神の已に命じ給へる業なりと堅信して、カン子クカット州ハートフオールド邑に於て數千弗の資金を募り、ハートフオルドと名くる女學校を設立せり、當時世人は婦女にラチン語或は道義學等を授くるとを必要させずとの論旨を持する者多けれども遂に彼の英氣に威服して其爲す所に任するに至れり、爾後入學者陸續として絕へず、忽ちにして校内に充滿するに至れり、數年後女史も亦此校に入りしが、其中にて送りし愉快なる日月は生涯忘失する能はざりしと云ふ。

女史の此の校に來りし時、其齡僅かに十二年なりけるが、勉學の傍教授を手傳ひ、之に因て學資の幾分を得父の負擔を輕くせり。

ビーチャー氏バストン府へ招聘せられ、六年間牧會の職を勤めしが、西部の青年を教道せんと熱望せる折柄、恰も好しオハイオより招かれ、シンシナチなるレーン神學校の總長を托せられしかば、家を擧つて此地に移住し、其後四年を經て、女史二十五歲の時、同神學校の教授ストー氏と結婚せり。

奴隸の問題始めて起るや、シンシナチは盛んに奴隸を使用するケントッキーに隣れるを以て、議論紛々として舌戰の中心となり殊に神學校は爭論の尤も劇しき場所となれり、同校生徒中南部より入學せる者は已に其家に使役する奴隸を解放するものあり、又當地に於て黑人の小兒の爲に學校を建設するとに力を添へたる者さへありき、然るに奴隸を使用するとを正理と思惟するもの共相集つて暴動を起し、解放を主張する新聞記者ドクトル、ヘーレー氏の印刷器械を破壞し、二回まで之を河中へ投じ、或は自主となりたる黑人の住所を襲ひ、或は之を殺傷し、將に神學校をも襲擊せんとする勢あり、於是委員等は校内にて奴隸に關する一切の談論を禁ぜしかば、學生等相率ひて一時悉く退校せり。

此時ビーチャー氏は東部に赴き、學校の爲に巨額の金を募集して歸來れば、校内寂として人影なかりける、然れども尙ほ數年間、此處に居留して職務を執れり、ストー夫人は黑人の小兒を已が家に集めて自ら之を教育す、其中一人の英兒ケントッキーの地主の訴へに由り、拘引して競賣に附せられたるものありければ、其母狂氣の如くになり、來てストー夫人に救を乞ひければ、夫人憐憫の情に堪へず、其朋友中より多くの金を募りて爲に此小兒を贖へり。

爭擾益々烈くなりければ、ビーチヤー氏の家族はストー氏と倶に北部に移り、ストー氏はメーン州ボルレスウイクに在るボードイン大學の敎授となれり、此際女史は時々文章を新聞紙に寄せて少許の謝金を取り、又新英國談てふ書をものして五十弗の賞金を獲たり、當時六人の兄弟は皆傳敎に從事して母の遺言に應へ、女史も亦齡已に四十に達し、一小兒の母となり、又敎師となり、其他幾多の家業に追はれ、他に何事をも爲し能はざる可しと思はれける、斯る場合に在て、世の常の婦人ならんには、家事を營むの外何をも爲し難しと謂ふべけれども、流石に非凡の女史にて、身は塵埃の中に埋れども心は天外に雄飛して、奴隸解放を以て已れの世に盡すべき義務とせり。

此比奴隸拘束の法律に照し、所在に逃亡せる奴隸を追捕して從前の苦役に從へしめ、或は死期に瀕する等の殘酷なる事ありと雖も、北部の人民は恬として之を顧みざるを見て、女史は憤激の情に堪へず、奈何んしてか一枝の筆を揮ひ、世人の熟睡を攪破せばやと思へり、或る日曜日ブロンスウイツクの會堂に於て不圖オンクルトム（書名）の腹稿を始め、精神勃興禁ずる能はず、急ぎ家に歸りトム臨終の段を寫し、試に十才と十二才なる二子を呼びて之を讀み聞かせしに、悲哀涕泣自ら禁ずる能はずして「ノー母上よ奴隸を使役するは世の中にて最も惡しき事なり」と云ひしとぞ。

女史自らパストンへ赴き、非奴隸會所より書籍を借讀して獲たる事實を材料とし、滿腔の熱血を灑て一篇の小說を草し一千八百五十二年三月二十日に於て之を出版せり、女史自ら本書の問題時好に投ぜざる故購讀者なかるべしとの念慮を起し、殆ど落膽せんとしたれ共、可成販路を開かばやと思ひ兼て奴隸の事に關して痛心せらるゝ、英國女王の配偶アルベルト公に一部を呈し、又ウイルボルフオールスの親友の子なるマコーレー卿、チヤールス、ヂイツケン氏、及チヤールス、キングスレー氏に各一部を贈り、然る後ち煩悶なる母たり妻たり、敎師たり、家政者たり、又著述家たる女史は靜寂なるメーン州裡に潛居して、世評如何と待居たり。

何ぞ料らん僅々何日を出ずして一萬册を賣捌き、尙八個の活版機械にて晝夜を別たず印刷して漸く需用に應ぜんとは、又英京に於ても六ケ月內に三十版を出し、一年間に三十余萬册を發賣す、而して同府の六大劇場は爭つて此書中の事蹟を演じ、且東西南北より書翰續々到來して絕ゆることなく、就中アルベルド公は懇到なる謝狀を賜へり、ヂイツケン氏は本書を智を盡し情を籠めたるものなりと評し、キングスレー氏は完美なりと讃し、又シヤフトベリー侯は基督敎信者にあらざれば斯の如き世界を驚倒する書を著はすこと能はずと云々と激賞せられ、之に加るに六萬二千四百四十八人の記名せる帳簿に、英國婦人より米國婦人へ寄る一書を添へて送り來れり、又ブラツクウード氏は當世の著者の企て及ばざる筆力ありと云ひ、ジヨージ、エリオツト氏も亦優美なる書簡を贈り、許多の大雜誌は永らくチンクル、トム、ケビンに係る事を記載して、世人の注意を惹起せり。

當時ライマン、ビーチヤー氏は逝し深く其娘の盛名を博せしことを喜びしならん、及び慈母在天の靈も亦然らん、而して女史は幾多の出版に由て得し潤益の分配として數千弗を受けゝれば、亦以て其勞を慰むるに足ることを感ぜしならん。

千八百五十三年ストー氏は名聲嘖々たる其妻と相伴ひ保養の爲に洋行し、着船の港リヴアプルを始として、グラスゴー、エデンボロー、フベルデーン及ドンデー等到る處に心に期せざる優待を受け、街上を通過するときは、士女路を遮りて花を車中に投入し、小兒は追從して「彼夫人のなり、其額上の捲髮を見よ」と叫び合へり、又貴賤上下の差別なく多くの人々より小錢の贈與ありて其額積で一千金貨に達す、此時醵金の爲委員の一人某村に到りし時、一寡女に遇ひ汝は彼書を讀むを叶はざれば何の感情もあらざるべしと言しに、然り妾は讀むこと適はざれども我子が彼を讀み聞せしにより、些少の金を心掛け置けりと應へしと云ふ、亦以て人心の此に集りしを見るべし。

女史はサゾルランド公爵夫人の邸宅へ招待せられ、一世の名士パーメルストーン卿アルジル侯マコレー、グラツドストーン及び其他の人士に會合せり、此時公爵夫人は女史に奴隸の枷に模造したる鈍金の腕飾を贈與し、其上に此は遠からずして破却すべき鐵鎖の紀念物なることを信ず云々と銘せり。

歐洲より歸國の後快活なる外遊の紀念と題する一書を著し、亦世に行はるストー氏のアンドヴアル神學校の敎授となるに及んで、家をマサツセツフ州に轉ぜし後、尙數種の著作を爲せしに、孰れも世人に愛讀せられざるはなし、此頃も尙ほオンクル、トム、ケビンの發賣過まず、英國のみにても百五十萬部以上に及びたれば、內國に於ても蓋し之に倍徙する程の大部數を賣捌きしなるべし、尙ほ此外佛國に於ては十二版、獨逸に於ては十一版、西班牙に於ては六版に及び、更に盈語ハンガリー語を始め、十九個國の語に重譯せらる、殊にベンガルに於ては其際價甚だ貴く、シヤム國の貴婦人某は此書を一讀の後大に感ずる所あり、自家に使役せる一百三十の奴隸を解放し「後來斷て人身を購賣せざるべし、而して吾は切にハリエツト、ビーチヤー女史の如き人物たらんことを願ふ」と云ひしとぞ、佛國人民は是時よりオンクル、トムの愛讀せし聖經を讀まんと欲する心を起し、頓に聖書の發賣高を增すに至りしと云ふ。

此オンクル、トム、ケビンの如き一定の目的を以て作れる書は、他の空想を構へ、筆端を走しらせたるものと異り、永く後世に傳ることを知る可きなり。

南北戰爭の後、女史家をフロリダの橘林中に搆へ之を冬居となし、同處に於て黒人の爲に宏大なる會堂を築き、ストー氏は其說敎を擔當し、倶に與に碎勵せり。カンチクチカット州ハートフォルドの夏居は、外圍と云ひ、屋内と云ひ、倶に優美を極めたるものにして、女史を景慕する百千の來客を接待するに適せり。斯くて女史七十一回の誕辰に及び、女史の著述を出版せし書林協同してマサッセッ州知事の官舍に於て大園遊會を催し、詩人、文士、技術家、政治家、及改良者等を會し、各其得意の詩文演說を以て、文壇の女將軍を賞揚し、其偉勲を發表せしめたり。

女史の生涯の世界に稱せらるゝ美擧は遊手に由て成らずして、義務に迫はれて繁劇なる者に由て成就すと云ふ事實を證明したるものなり。

小說

○理想の紳士

第八回　始めて姓名を冒す　　月の舍しのぶ

町田は之を見て氣の毒がり、

ヲイ〳〵武之助君、

と云つて止め乍ら、

實にアナタの御深切を謝します、大胆なる御處行は決して忘却しません、何かお禮が出來ますならば‥‥然し此の些細なものでも、

と云ひつゝ、彼の金を拾ひて裹の手に渡さんとすれば、裹は鄭寧に腰を屈め静かに返答して之を返したり。一は渡さんと搆へ他は受取らじと覺悟する様ありき、遂に町田は無決心の儘金をポッケットに落し、茫然として彼が、大胆、丈、怖れざる顔付、を見つめたり、

アナタは幾年ですか。

大方十五です。

アー、

殆んど溜息の如き歎息の次に、

私しは町田と云ひます、町田辨二と、もしアナタが‥‥有がたう、さやうならッ。

さやうなら。

町田は半ば手を差出して握手せんとしたりしが、裹が其儘無頓着に別れたるより彼も其儘別れて武之助の跡に續けり。

余は先づよかりしと安心してニコ〳〵するとき、裹は飛んで走り來つたり、

行ちまつて善つたチー。

本當に、

と云ひ乍ら既に忘れて其邊に遊び廻れり、而も小枝を取つて振廻はし且つ切りに何やらん地上に文字めきたるものを書く風なれば、余は始めて心附きて裹に文字を書くことを敎へんと云ふに、彼は狂へる計りに喜こびたり。砂を均らして先づ彼

の姓名を書くことを敎へたり。斯て日も早や暮に近ければ余は裹と共に殘念ながら家に歸へり、更に一層の殘念ながら門前にて裹に別れて內に入りぬ。此夜は父特の外に遲く歸り玉ひ、火爐の前に安臥して何やら心配せらるゝやうなりしが、余を促して先づ床に入らしめられし、然るに夢未だ半ばならず、眠るともなく覺むるともなき折柄門外大ひに戶を叩くものありし、余は殆んど夢中にて之を聞くとき、父は暫らく用心して初めて出て掛け戶を開かれしやうなりし。　余が枕元に裹の聲したり。

編者云く、此篇尚長し余白なくして乍遺憾此にて斷つ。

寄書

○衣服を縫ふ貧女へ

西京　なでしこ

夜は更て人は寢ねたり微かに聽ゆるものは卿の歎聲風寒く月は冴たり卿の憂鬱は何ぞ謝らん此歎聲を聽き此憂鬱を察するもの木石にあらざる限り誰か卿を憐まざらん我は無情の男兒にあらず能ふ可くは否如何にもして卿を慰めたしと思ふなり、若し夫れ卿の歎聲は喜聲となり卿の憂は慰みとなりなば我は如何に喜ばん我先づ歌を唱ふて卿に聽かせたし暫く手に持つ針を下に置きて聞き玉へ

昨日も今日も　又　明日も　朝早くより　夜半まで　卿の手には
やすみなし　針と糸とを　友として　日々縫へる　唐衣
幾枚なるか　數しれず　疲れやすらん　手も指も　肩も腰さへ
痛みなん　憐卿ほど　世の中に　働らく人は　なきぞかし」
さるに卿は　貧しくて　食ふも衣るも　まゝならず　人は遊べど
卿のみ　見向きもなさで　かせぐなり、人は錦の衣着れど
卿は常にやれ衣　人は佳肴を食へども　卿はいつも
ばんの片　憐卿ほど　世の中に　憐れの人は　なきぞかし」
されど歎きぞ　なすなかれ　卿は實にも　幸はひぞ　破れたりとも
價あり　玉をつゝめる　衣なり　錦の衣　着し人に
卿に劣る　ものの多し　たゞ貴きは　心なり　外をかざれる
衣ならず　憐卿ほど　世の中に　幸ある人は　なきぞかし」
よしや暫しの　やすみさへ　思ふまゝには　ならずとも　よしや終日
ぬい針に　針の山をば　通るとも　暫し忍べよ　我神は
卿を何時まで　すつべきぞ　天つ使は　降りまして　卿をやすけく
守るべし　憐卿ほど　世の中に　樂しき人は　なきぞかし」
あな貴ふとしや　我神の　めぐみの露に　うるほいて　淸き御國に
遊べかし　卿のたのしみ　限りなし　夜はいたくも　更けるなり
縫針道具　方付けて　淸き御國に　遊べかし　卿の夢ぞ
うらやまし　憐卿ほど　世の中に　榮達ある人は　なきぞかし」

我は斯く拙なき文字を以て我は斯く拙なき口調を以て卿を慰めんとす然れども卿を慰むる大なる力はあらざるべし若し少しにても卿の心の重荷、胸の悶を取り去り得ば我は大に喜ぶ可し卿よ卿の重げなる頭を少しく擧げよ、卿よ卿の垂れたる眉を少しく開け然して歌へ然して歌へ然して舞へ然して跳れ世間に鬼はあらざるぞ世間の男兒、婦人、小兒、皆無情の木石にあらぬぞや卿の不幸は何時までも卿の周圍にあらざるべし憐、夜は更て月は冴へたり吹く風は寒し暗き燈將に消へんとす卿の眠ぬ可き時の來れはイザ休の淸き國に。

○閑亭梅

林　甕臣

きさらぎばかり、ものへまかりけるに、ふとふみたがひて、あらぬ路の片山さしを、たどりゆくに、木立ものふりて、うさましきまで、すごうあれわたりたる家の庭あり。梅の花の、盛りに咲きみだれたるが、薰りさへにならぬを、見すぐしがたくて、垣のくづれより、見いれたるに、池にのぞめる廊など、ゆがみよろぼひたるかたへの西おもてに、いやしからぬ女の、けはひいさあでに、らうたげなるが、春の日の長閑やかなる空のけしきを、見いだして、よりふしたり。かなりくる袖の追ひ風さへたゞならねば、そゞろに心ときめきせられて、やをら折れ殘りたる透垣のもとに、かくれ立ちて、さかうながめやりうかがひつるを、鶯のあわたゞしう、ヒトク〳〵と囀ろかしぬるも心のおにに、なまはしたなう、まばゆしや。

さなつげそ宿のあるじよ鶯よ
たゞ花の香によれるばかりぞ。

新報

（此の欄内自由に轉載を許す）

○地久節の議に贊成す

文第二巻第五號に地久節と題する一篇を掲げたり、吾人は左に其の全文を轉載すべし、

畏けれど我が皇后宮陛下の夙に女子の教育に御心を用ひ給へることは余等臣民の深く感銘する所にして今更其の功績を數へ挙るにも及ばず。されば臣民たるもの女となく男となく常に 陛下の徳を頌し、其の仰慕の情を表すべき機會ある毎に必之を失はざらんことを務むるは著明なる事實なり。然るに余輩の甚遺憾とする所のものは今日に至るまで世に此の敬愛すべき皇后宮陛下御降誕の日を祝すること甚稀なりしことこれなり。只に一般人民の之を祝日とせざるのみならず、女子學校の若き殊に 陛下の恩徳を蒙れる學校に於ても、此日を以て陛下の萬歳を公祝するの式典を擧ぐるもの甚少しとす。蓋是れ全く此の日を以て天長節の如き公けの祝日と定められざるによるならん。

故に余輩は今年より皇后宮陛下御降誕の日なる五月廿八日を以て國の祝日と定められ、全國一般陛下の恩徳を頌し 陛下の萬歳を祝すること猶天長節の如くせられんことを希望す。縦令又此の日を公けの祝日と定められざるも、余輩臣民に於ては自進で 陛下の萬歳を祝するの此の好機會を失ふべからざるなり。

余輩は余輩自此の事を進言する能はず、又直に有司の採擇を望まず、余輩の尤希望する所は 陛下の恩徳に浴し 陛下を仰慕奉重するの情殊に深き我が國婦人先進諸媛の共同して此の祝日の制定を申し下されんことこれなり。諸媛にして此の制定を願ひ奉らば、思ふに必其の請ひを容れ給ふことあらん。若し又其の請願を許し給へざるに於ても、余輩臣民たる者は私に祝賀の意を表せざるべからざること勿論なれば、今後此の日を以て余輩臣民一致共同の祝日となすの計畫をなすべきなり、而して此の計畫に率先盡力するは亦諸媛の義務なるべし。先進諸媛請ふ熟慮あれ。

こゝに題したる地久節は只天長節に對へて假りに稱へ申せるまでにて、かゝる名目は余輩の兎角申すべきことにあらざること勿論なり。

吾人は誠實に此の意見を贊成し、且つ熱心に女流諸君に勸告すべし、嘗て本誌第八十八號に中井某氏の寄書を掲げ右同樣の主旨を披露したるが、爾來今に至りて復び文記者の忠告に會するに至る、感謝、慚悔、交も至る。

○「國の基」と云へる女學雜誌

來る四月一日より「國の基」と云へる女學雜誌新たに起らんとす。其の來示に據れば、理科大學教頭高等女學校長理學博士矢田部良吉君其主筆と爲り、高等女學校教頭米國學士能勢榮君其主幹と爲り、文科大學教授第一高等中學校教諭神田乃武君其の記者と爲り、東京興文社より出版せらると云へり。而して其の發刊趣意書なるものを見るに云く、

女子教育の論議々四方に起り、女黌の設續々各地に成るか如き實に喜こぶべしとす、然れども退て詳かに其主旨と方法とを察すれば、或は宗派に因るものあり、又は過劇に陥るあり、守舊に失するありて、一も中正の旨義に依るものあらず、恰も暗夜針路を取らずして航海するものゝ如く、一旦不測の難に罹れば、其社會を誤るもの豈に少小ならざるや必せり。

左れば三君は之に憂憤慷慨せられたるものと見ゆ經世の爲に頗ぶる喜こぶべきことゝ云ふべし。

○女小説家と高等女學校

花圃女史、曙女史の流亞は多は高等女學校の卒業生にてあるなり、然に高等女學校長矢田部良吉君の密に關係せらるゝ

羅馬字雜誌は、其の本月發行の分に於て如左く言へり、
中にも年若き女子の手に成たるものは尤もムチャクチャなり、女子の書たるものは、世の人も少しは遠慮して十分の批評を下さゝれば、付け上つて益々拙劣の小說を出版し、其の見苦しきと言語同斷なり、斯樣な小說を書んより寧ろ温和しく針仕事でもして居た方が十倍も百倍も優れり、若し何でも箇でも小說を書んとならば、更に善く文學を修めて後に初めて筆を執るも決して遲かるまじ。
吾人が意見の暗合したるは喜こばしきと也。

○結婚の自由

法理精華第六號は左の如く云へり、
人の自由は結婚の自由より自由なるものはあるべからず、其幾歲以下の少壯者は結婚す可らずとの道理のあるまじきは幾歲以上の年長者は結婚するを得ずとの法律を要せざるにて證すべき也……サアハ我憲法にも結婚の自由を臣民の權利より取除けられしにやと疑ふ人もあるべけれども左るにはあらで元來結婚の自由は法律に由りて始めて與へらるの權利ならずして人の生來に固有せる特權あると又右に述べたる不必要の理由あるとに由りて然るならん。
政府は固より結婚の自由を何如にともする能はじ、然れども豈に之を取締るとを得ざらんや。

○米國女子撰擧權擴張會の運動

去年末米國の女子撰擧權會に於て第二十年會を開きたる當日の細報は、此頃郵送の新聞雜誌上に極めて精密に記載せらる、吾人は今ま先づ該會に於て決議せられたる要件を掲ぐべし、

本年間事業運動の計畫

各州の議會に請願し女子撰擧權擴張の事を主張し、尙ほ國會に請願して憲法の解釋方改正の事を主張すべし。
既に撰擧權の多少を與へられたる十四州三地領に於て尙其權の實行方に付て主張する所ろあるべし。
左の手段によりて輿論を教育すべし、
公けの集會に由りて、
女子撰擧權を主張する新聞紙を所々の書籍館及び讀書館に置くとによりて、
普通の新聞紙に女子撰擧權の論文を投ずるとに由て、
女子撰擧權を論じたるリフレット（小册子）を郵便、配布（人々に又戸々に）、特に女學生中に配ばると等に由て。
女性に都府州聯合等の政治の事、及び一般の輿論の事を教

へ其の公けの義務を感ぜしむべし。
州に、各地方に、バザール慈善市の如きものを設け資金を擧ぐべし。
各州の部會に勸告し更に部會の支會を設立せしむべし。
婦人禁酒會中の撰擧權の部會と連合共同すべし。

斯て會頭一名、副會頭十二名、執行委員長一名、外國通信書記一名、通信書記一名、記錄書記一名、會計一名、遊說員一名、各州部會々頭三十八名、同各州選出の執行委員三十二名なり。

蓋し女子撰擧權擴張論の運動尤も盛んなるは万國中アメリカ合衆國に過るものあらず、而して合衆國に於ては此會實に此大運動の本部と爲れる也、故に合衆國に於ける尤も熱心なる撰擧權擴張論者は、其男たると女子たるとに論なく大抵此の會中に含有せらると知るべし、故に吾人は左に右改撰せられたる役員の性名を悉く掲載し置かんと思ふ也。

但し合衆國に右の會と殆んど相似たるものにて National W. S. A. と云ふあり、只だ冠らすに米國と云ふと國立と云ふとの相違にて別段の差なし。左れば此度右兩會合併の相談あるよし、吾人は其の成べくは共同一致せられんとを遙かに希望せざるを得ず。

OFFICERS. A. W. S. A.

President—Hon. Wm. D. Foulke, of Indiana.

Vice-Presidents at Large—Mary A. Livermore, Massachusetts; Hon. George Wm. Curtis, New York; Hon. George F. Hoar, Massachusetts; Clara Barton, District of Columbia; Mrs. Tracy Cutler, Illinois; Mrs. D. G. King, Nebraska; Rebecca N. Hazard, Missouri; Martha A. Dorsett, Minnesota; Mary B. Clay, Kentucky; May S. Knaggs, Michigan; Mrs. Zerelda G. Wallace, Indiana; Mrs. Phebe C. McKell, Ohio.

Chairman Executive Committee—Lucy Stone, Massachusetts.

Foreign Corresponding Secretary—Mrs. Julia Ward Howe, Rhode Island.

Corresponding Secretary—Henry B. Blackwell, Massachusetts.

Recording Secretary—Mrs. M. C. Callanan, Iowa.

Treasurer—Mrs. Margaret W. Campbell, Iowa.

National Lecturer—Rev. Annie H. Shaw, Illinois.

Vice-Presidents of States.

Maine—Rev. Henry Blanchard.
New Hampshire—Mrs. E. G. C. Gilbert.
Vermont—Mrs. A. D. Chandler.
Massachusetts—Hon. William I. Bowditch.
Rhode Island—Mrs. Elizabeth B. Chace.
Connecticut—Emily P. Collins.
New York—Mrs. E. R. Rawson.
New Jersey—Mrs. Antoinette L. B. Blackwell.
Pennsylvania—Miss Mary Grew.
Delaware—Dr. John Cameron.
Virginia—Mrs. Orra Langhorne.
North Carolina—Mrs. Julia Goodridge.
Louisiana—Mrs. Caroline E. Merrick.
Texas—Mrs. Jennie Bland Beauchamp.
Ohio—Mrs. Sarah C. Schrader.
Indiana—Mrs. Mary E. Haggart.
Illinois—Mrs. Mary E. Holmes.
Kentucky—Miss Laura Clay.
Michigan—Mrs. Mary L. Doe.
Wisconsin—Dr. Annette J. Shaw.
Minnesota—Mrs. Ella M. S. Marble.
Iowa—Mrs. Mary B. Welch.
Missouri—Mrs. Amanda E. Dickinson.
Arkansas—Miss Kate Cunningham.
Kansas—Mrs. Laura M. Johns.
Nebraska—Mrs. Kate Connor.
Colorado—Mrs. Julia A. Sabine.
Nevada—Mrs. Maria H. Boardman.
California—Mrs. Sarah Knox Goodrich.
Oregon—Rev. Mr. Eliot.
Wyoming—Hon. J. W. Hoyt.
Washington Territory—Hon. Roger S. Greene.
Dakota—Major J. A. Pickler.
Utah—Mrs. Jennie Anderson Froiseth.
Idaho—Mrs. A. S. Duniway.
Arizona—Mrs. S. J. Proctor.
New Mexico—Mrs. Nestor Armijo.
District of Columbia—Hon. Fred Douglass.

Executive Committee from States.

Maine—Mrs. Augusta M. Hunt.
New Hampshire—Mrs. A. S. White.
Vermont—Laura Moore.
Massachusetts—Mrs. Judith W. Smith.
Rhode Island—Mrs. S. E. H. Doyle.
Connecticut—Hon. John Sheldon.
New York—Mrs. Anna C. Field.
New Jersey—Mrs. C. C. Hussey.
Pennsylvania—Dr. Caroline M. Dodson.
Delaware—Mrs. Gertrude Easby.
Kentucky—Mrs. Ellen B. Dietrick.
Tennessee—Mrs. French.
Texas—Mrs. Mariana W. Folsom.
Arkansas—Mrs. McCullough.
Ohio—Dr. Juliet M. Thorpe.
Indiana—Mrs. Mary S. Armstrong.
Illinois—Mrs. C. V. Waite.
Michigan—Hon. T. W. Palmer.
Wisconsin—Mrs. Alura Collins Hollister.
Minnesota—Dr. Martha G. Ripley.
Iowa—Mrs. M. J. Coggeshall
Missouri—John M. Dutro.
Kansas—Mrs. J. A. Thurston.
Nebraska—Lucinda B. Russell.
Colorado—Mrs. Albina L. Washburn.
California—Mrs. Elizabeth Kingsbury.
Oregon—Mrs. A. S. Duniway.
Wyoming—Dr. Hayford.
Washington Territory—Miss Bessie Isaacs.
Dakota—Mrs. Alice Pickler.
Utah—Mrs. A. G. Paddock.
Idaho—Wm. S. Duniway.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○養育院慈善會　東京府養育院慈善會は上野公園內華族會館に於て來る四月十三、十四、十五の三日間開會する由にて東京府廳內に事務所を設けたり委員長は銀林書記官委員は與倉、戸井田、中野、飯島其他の屬官數名なる由。

○成立學舍女子部　は一昨廿年四月に創設せしが生徒學業の進步著しく去る十六日より定期試驗を施行せられ其本科を卒業せしもの十三名有之來る四月一日には盛大なる卒業式を執行せらるゝ由。

○女子の洋行　芝區愛宕町一番地寄留山口縣平民松井仙吉氏の二女みね子（十八年）は學術修業の爲め向ふ六ヶ年間米國へ留學せらるゝと云ふ。

○慈善音樂會　去十四五の兩夜厚生館にて開きたる同會には兩夜とも格外の聽客あり、只だ殘念なりしは第二夜に出づべかりし宮內省の伶人は何かの不都合あるよしにて頓かに斷はりとなりしと也、收入金二百五十圓諸引殘餘一百圓餘を同志社大學へ寄送らせらるゝ由也。

○鹽津女學校　鹽津貫一郎氏の設立せられたる京都御幸町の鹽津女學校は去る十六日より當學期の試驗を執行せられしが來月一日は同校創立二年回に相當するを以て同日の年回を兼ね卒業證書授與式を執行せらるゝと云ふ。

○滋賀高等女學校　滋賀縣下にては之迄女子に高等教育を教授する學校なかりしが有志者の盡力にて私立教育會なるものを起し同會の附屬として滋賀高等女學校を創立するの都合なりと尙ほ聞く處に由れば遲くも來月中には開設の運びに至るべしと云ふ。

○富山縣婦人交際會　は每月一回會員の集會をなし互に親睦をなし又ハ名望ある人々を聘して婦人に必要なる講話を乞ふ由なるが當時の會員の數は三十餘名にして追々盛大に赴くと云ふ。

○福山女子手工教場　濱島國福山の有志者ハ女子職業學校を設立するの目的にて松城小學校內に女子手工科教場を置かんとを其筋に出願せしが其認可を得て去月十八日より開場したる由。

外報

（此欄內自由に轉載を許す）

○女子大學教育會　米國マッサチウセットの會は大學入校の生徒に資金を給し又は書籍を貸すの會合なるが、去月其の第十三會を開きマリアンタルボット孃を會頭に撰擧したり、因に云ふ同會去年中の入金四千八百〇七弗二五にて出金四千七百八十二弗二五、而して去年中四十六の女生に百六十六卷を貸し八人の女生に給助したりと云ふ。

○ロシア女子農學校　センドランド、スヱーデン、ノルヱー、スヰツルランド等には女子農學校あれども魯士亞には未だ之れあらざりし處ろ今度グリニウ夫人の發起にてカイエウ（Kiew）に之を設立したり、之を魯士亞にての最初の女子農學校とす。

○女職工保護會　紐育の同會（N. Y. Working-Women's Protective Union.）の報告に依れば過る二十五年間に女職工に貸銀を拂はざりし雇主を訴へたると一萬二千人、女職工を助けたると四萬一千人、女職工に職業を與へ若くは補助したると三十萬人なりと云ふ。

○日本皇后陛下　米國ボストンの女學雜誌第四號に　我陛下に付て左の如く記し奉まつりたり、

The Queen of Japan tries to promote the interests of women. She is very charitable and is a patron of the Red Cross Society and of the Tokio Charity Hospital. She is especially interested in the education of Japanese women. A school for the daughters of the nobles is known as the Empress' School, and one of the pictures on its walls contains poetry written by her. She is a fine Chinese scholar, and many of her poems have been set to music and used as national songs.

○アフリカ女學校　今を去る九年前にアフリカの土人を敎育せんと熱心したる有名の神學博士ガーチフット氏はアフリカに渡りて數週間目に死去したり、然るに其の娘君たるガルチツト、バルボサ夫人は初めより又た父の志を繼ぎて此の事に熱心したるが、父死せしのちはいよく奮發して西アフリカのリベリアに女學校を開き土人の女に初等敎育を敎ゆる外に又た宗敎を敎へ宗敎は何派と云へざる純正のキリスト敎を敎へ、且つ其學校は何會社にも屬せずして獨立するよし也。

○出版書目　先月中官報を以て廣告せられたる書籍の中にて女子に關するものを擧ぐれば左の如し

歐米婦人之狀態	一冊	譯述兼發行者	榎本梅三郎	東京
脩身敎育噺五編	一冊	著作兼發行者	日置岩吉	大坂
音樂道のしるべ下	一冊	著作者 發行者	鳥居忱 岡本賢蔵	東京
産婆改良手引草	一冊	編輯兼發行者	深水橘治	長崎
紀元節唱歌	一冊	著作者 發行者	高崎正風 頴川首	東京 長崎
閨中美人嘆	一冊	著作者 發行者	太田貞次郎 岡本仙助	大坂
花嫁	一冊	著作者 發行者	加須屋[illegible] 大淵濤	大坂

小供談

本號餘白に乏しく此の欄を省く。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

べきは先つ其頭は通例よりか小なれども緻密にして尤も堅固に見ゆ、コーカシアン人種に在りては其毛色は粗にして鳶色に黒味を帶ぶ、眼は灰青色、皮膚は多く日光に曝さるゝ人に在りては黒味を帶ぶれども然らざれは艶あり、躰格は緻密にして、堅固なり、身躰各部の比例其大小重量より論ずれば此性に屬する人こそ世界中に尤も丈夫なる躰格を有すると申すべし、額は少しく後に引き込みコメカミに至るに從ひ漸く狹し、鼻は通例大ならず、ギリシヤ風なり、膽汁質の方大に發達したる人に在りては鼻は長くして細し、オト大王は其一例なり、膽汁質の餘り多分ならざる人に在りては、ウエリントン侯じヤクソン將軍に於けるが如く、鼻は大にしてローマ風なり、英王アルフレツド米國副大統領を務められたるアレキサンデル、ハミルトン、の如きも此性の膽汁質の多き部類に屬する者也。

多血無色液質

其二。多血質と無色液質との複性、此複性の特點は先躰格低く、肩廣し、肉は柔に頭は廣くして少しく短かし毛色薄く皮膚艶に額は廣くして少しく高し、鼻は通例長からず大ならず、身躰の外部は肥大にして頸後並に頭後は廣し、此性の人は兎角放逸に流れ易し、それゆえ古より此性の人にして善事を以て世に有名なりし人殆んどなし、然るに惡事放逸の所業を以て名高きもの多し、其中にて殊に記すべきは、ローマの虐王ネーロ大帝あり、ダニエルデフオーは別に大したる善人にもあらず英雄にもあらざりしが其著ロビンソン、クルーソーは随分有益なる書あり、故大判事ストレー氏はマサチユセツトの生れにて有名なる法官なりしが此性の人なり

多血頭大質

其三。多血質と頭大質との複性、此性の人は其毛色は薄く、肌膚は艶ありて、躰格は纎弱にして皮肉は寧ろ柔かなる方あり、此性の男女は筋力强からず、力役に堪え難し、額は常人よりは直立して、上の方にゆくに從ひ廣し、鼻は通常の大さなれど多血質の方多きときは頭大質の多き人よりも大くして少しく屈曲れり(横に曲るにあらず)、唇は薄き方なり、此性と混じやすき性唯一あり、則ち多血

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

膽汁無色液質

膽汁頭大質

質なり、然し能く注意せば其分別明なり、純粹の多血質の人と此複性の人と相異なる點を擧ぐれば、純粹の多血質よりも筋肉の發達少く、額は直立してコメカミの邊に至るに從い廣し、純粹の多血質に在りて上にゆくに從い收縮る。

其四。膽汁質と無色液質との複性、此性の特點は身躰の何となく肥胖なると、皮肉の軟らかきと、頭の著しく圓きと、頬の較ブテ〳〵してゐると、等なり鼻の形は中途にて曲りたるもあり、截然としたるもあれども通例短し、大さは尋常なり、米國革命の役に有名なるマクドウエル將軍、グリーン將軍大統領フヒリモアの如きは此複性に屬する人なりし。

其五。膽汁質と頭大質の複性、此性は則ち彼の學士ヒポクラテス氏が鬱質と名けたるものなり、毛色の立派なると、肌膚の濃色なると、躰格の寧ろ瘦がたなれどシッカリして見ゆると、等は此複性の他に異なる所とす、鬢は少しく壓へ付けられたる樣にて額は少しく引込み上部三分の一ほどは下部よりも廣し膽汁質の方多分を占むるときは顔色は華麗なり、此性は膽汁質と其顔色、躰格とも似より居るゆえ屢見誤るとあり、然し純粹の膽汁質に在りては額は余程後部に引込みて鬢の邊に至れば少しく收縮す然れども此性に在りては上部鬢の所に至れば却て少しく擴がる、此性は多血頭大質に比すれば筋肉も發達し且ツ勞苦に堪ゆ、此複性の適例として茲に掲ぐべきは有名の哲學者ベーコン公なり、公は寧ろ膽汁質の發達せし人なりしと傳ふ、其次には米大陸の發見者クリストファ、コロンブス。の如きも此性の人なりしと云ふ。

三性の複合

多血膽汁無色液質の複性

第四　三性の複合

其一。多血膽汁無色液質の複性　此複性の身躰は何となくタップリして肉は可なりシマリ毛髮は粗らく頭は通例大なる方、身長は屢六尺に達する人あり、此性の毛色眼色肉色は多血膽汁質の複性と寸分違はず、其理由は二者の差別は唯一は無色液あるも一は之なしと申すまでよして無色液は固より肌膚の色に關係なし、且ツ此複性は多く多血膽

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

歯の衰弱の原因

は食物が誤て氣管へ落ちんとするを右の戸が押し返すより起るなり。

食物は食道の側にて段々と押し下されて胃に落ちるなり、胃に入りて後始めて吾人の所謂消化機の作用起る、然し胃の消化のことを恐しく申す前に唯今まで述べたることに就き、汝方に殊に記臆を願ひ度一二個條を申し置くべし。

先づ以上述べ來りたることにより、吾人は食物をよく噛み砕くことの必要を知るなり、なぜなれば吾人がまだ半分もかみ砕けぬ食物を其儘嚥下すときには、胃に至つて中々に消化し難く、又た滋養になることもよく噛んだ食物の半分もないぐらいなり。

其次は歯を極めて大切にせねばならぬことなり、悪い歯は時として實に堪へ難き痛を吾人に與ふるのみならず、歯が大概益にたゝなくなり、抜かねばならぬ様になれば、咀嚼が前の様に充分に出來ぬ故、大に消化機能を害するなり。

歯の衰弱するに付種々の原因あれども先づ其重なるものを擧ぐれば、

第一。病氣　是は誠に仕方のなきことにて、熱病などに罹りし後は歯が非常に速に弱ることあり、時として病後二三ヶ月の間に數枚抜かねばならぬ如き場合あり、然し汝方が病中に能く注意して、時をきめて度々歯を掃除することを怠らざれば、大に其害を減ずるを得べし、薬を飲みたる後などは別して掃除を怠るべからず、勿論熱病中に楊子にて歯を掃除することは宜しからず、口中があれてあるゆえ、楊子などにて摩するときは、琺瑯質則ち歯の上面にある光澤ある部分を害するの恐あり、微温水にて度々含漱するをよしとす、又た海綿を微温水に漬して歯を徐となでるもよろし。

第二。不潔　誰れでも一つの歯楊子を所持し、少くとも日に一度は歯を掃除すべき筈なり、これは朝起きて顔や手を洗ふと同じく當り前のことしたきものなり。

第三。食物　小供達は餘り甘ひ者を含りて歯を全く損ずることあり、小供には成たけ平易にし消化し易き食物をよろしとす、實に小供が最初僅に二本

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

消化と云ふ事

の齒を生じ、段々と多くの齒生え出で、悉く生え出でたる後は、更に抜け換りて新しき丈夫なる齒となるを見ても、造物主は小兒と成人の食物の違ふべき樣になし給ひしを知るに足るなり、若し此理を會得せずして小供が成人の食べ居る物は何でもほしがり、又はほしがる次第に與へるときは慥に其應報を受け唯齒を損ずるのみならず、氣質さえも害するに至る、愼むべきことなり。

第六　食物の事（消化と云ふ事）

サテ是よりは嚥下したる後食物は如何になるやと申す問題に答ふべし、或る御方は答へて云はるゝならん「知れたこと、胃に入って消化するのさ」と、左樣尤もなり、それだけは誰にても大抵は御存じなれども、胃と云ふものは全躰如何なるものなるや、又た消化と云ふものはどんな働きなるかと申すとに就ては、はッきりしたる說き明しをなすとの出來ぬ方もあるかと存ず、胃の形は色々の皮の層んだものより成れる一ッの袋の如きものなり、上下に一ッ、都合二ッの口ありて、斜に長し。

消化物不消化物の別

食物が一口ッ、上の方にある口より入り來ると直に胃の周圍の皮に一個の運動をおこし、今入り來りたる食物を胃の中に散ぜしめ、靜にそれをまぜかやす、このとき胃の內側にある腺と申す許多の少さき管より胃液となづくる一種の汁を分泌す、此汁は食物に混じてそれをとかす妙力を有つ、此運動は入り來りたる食物が充分とかされて柔かになり乳糜と申す汁に變ずるまで止まず、或る食物は胃に入りて他の食物よりは早く乳糜に變ず、吾儕は斯樣な食物を消化し易い食物と申す、又豚肉などは消化に長く掛るゆえ不消化物とは申すなり、胃の下にある口は已に消化したる食物を腸に下すために設けられたるものなり、此口には戸の樣なるものありて充分消化せざる食物の下り來るときは之を防ぎて再び胃に押し上ぐ、然し餘り急いで澤山食物をとりしときは、此戸は暫時は力を盡して居れども若し餘り押し下げらるゝ塲合には堪り兼ねて遂に戸を開いて未消化しない食物をも受くるとあり、あなた方も御存じの如く過食したり不

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

腹痛のこと

消化の食物を取るとき烈しき腹痛に罹るとあり、是れはつまり胃をイシメルとに當るゆゑ、つまり胃から意志返しを受けたと同じとなり。

腸

是より食物が消化して血に混じるに至るまでの手續を悉しく御話し申すには中々永くなり、その上隨分六つかしい學問上の語言を使わねばあらぬゆゑ大略を言ふに止むべし。

乳糜とは前にも申せし如く消化せし食物なれども、乳糜がみんな身躰の營養になるにはあらず、第二の手續に依り此乳糜の中より營養分、不營養分を分けざる可らず、此分離は乳糜が腸と申す長い管を通るときに起るあり、丁度口中にて唾が食物をやわらげし如く、また胃にて胃液が更に食物をとかせし如く腸に於ては更に第三種の液ありて今申したる分離の働きをなす、サテ此處にて營養分は分れて誠にうすき液となり無數の極少さき管を通りて頸の邊に在る大靜脈管に送られそこにて血に混じて心臟に至るなり。

不消化は萬病の原因

さて今まで述べたる所々により、食物をよく消化せしむると云ふとは如何程大切であるかは分解りしならん、古い俚諺にも「食べて生存る」と申し、一日も食物なくては此世に生存るとは出來ぬなり、時を定め量を定めて食を取り身躰の消耗を補はねば小兒は生長せず、成人と雖も生きて日々の勞動をなし兼ぬ、そして食物は消化しなければ無用の物なり、されば消化は健康の源にて不消化と云ふ一言はあらゆる病氣、孱弱、不便不自由の原因ありと申すも決して過ぎたる言にはあらず。

第七　食物（血の循環のこと）

血液循環のこと

前の二節に於て吾儕は食物が口中に入りてより、數時間を經て、其中の營養分は種々の手續順序をとふして稀薄き白色の液となり、靜脈に注ぎ入りし點まで說き明したり、血は此液を得て更に氣力を增し全身を廻りて至る所新しき物を與へて舊き不用のものを運び去るなり。

心臟

血が始めて出立し又た全身を廻り終りしとき歸り來る場所則ち云はゞ血の大問屋とも申すべきは心臟なり、血の身躰中にする旅行を名て血液の循環

酸素は血を新規にす

とは申す、なぜなれば血の旅する道筋は恰も一の環の如きゆゑあり、食物の滋養分が頸の返にて注ぎ込むところの静脈の血は殆んど全身を一周したる血あり、手にも往き足にも往き、脳にも往き、隈なく廻りて今や心臓に歸らんとする所の血なり、此血は始め心臓を出立せしときは赤き立派なる色の血なりしが、身躰を巡るうち、段々と力を失ひ心臓に歸る途中は全く濃き紫色に變ず、サア前申した滋養分は此血と交ざりて心臓に送らるゝなり、」あなた方は心臓が此血を如何にすると思ひ給ふや已に新しき養分を受けたるとゆゑ心臓は此血を再び出立せしめて、全身を旅せしむべき也、イヽヤ然らず、已に一回全身を旅して其養分を骨に與へ筋に與へ肉に與へ疲れはてたる血なれば中々此様に造作なく新しきものにはあらず、御存じの通り渾て躰内の機關の變化運動は中々込入りたるものにて血の如きも養分を受けて直に充分とは申し難し更に何か必要あり、何か流動物でないものが要用なり、あなた方の中誰れかそれは何であるか察て

肺の用

動脈

靜脈

動悸と云ふ事

給ふや、それは吾人が呼吸するとき吸ひ込む空氣の中に在る酸素と申すものあり

そこで心臓は右の濃紫に變りたる血と今其中に混りたる養分を一所に肺臓と申す機關を一返巡廻せしむ、茲で血は氣管より入り來る新鮮の空氣に接して其中の酸素を吸取りて色も生々したる赤色となる、これに依て血が全く新しきものになりしとが分解る、すると心臓は此血を受けるや否や再び押出して旅行せしむ、然し這度は肺ぐらいの近處ではなく、全身を一週せしむるなり、

心臓より血が出立する道は動脈と名づくる血の管あり、血の歸り來る道は靜脈と申して名は異なれども矢張同じ血の管なり

あなた方が左の乳の下あたりを押し給ふときは心臓の動くのを感じ給はん、これは心臓が血を全身に押しやるときになす極まつたる運動にて、通例動悸と申す、驚ろいた時、余り嬉しい時、餘り悲しいとき、又は疾走り烈しき運動なぞしたるときは血液の循環が頻繁なる、隨て此動悸の回數も増す

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

する事ゆへ、小さき農夫にては、田地の價よりも遙か多き財本を持ねば、之を使用する事は出來ない、若し機械と職人とは借受けて、働すとするときは、器械の借賃、運送の失費、其他職工の旅費、賃銀、等の爲めに、多くの時と貨幣とを費すのみにて、到底之を利用する事は出來ない、夫のみならず耕作の地面狹きとは、之に要する道路の爲めに、地面を潰すとも多ひ、殊に蒸機械の耕作は、其機械の容積も大なるものなれば、狹き田地にては之を運轉使用するに尤も不便なり、實地の經驗に依るに、一丁の田地を耕すには、五反の田地二枚を耕すよりも、時間は半分、入費は三分の二にて成遂げ得べし、其他牧畜にしても、百疋の羊を牧ふも、二百疋を牧ふも、其割合に牧場と入費と、手數とは要らない、之を以て見れば牧畜にも耕作にも土地が廣く仕掛の大きい程器械の利用あり勞力と財本の効驗あり富の生産に利益あるとは明である。

小農の利

以上は大農の利ある事を說きしが、サレば迚事情によりては、小農も亦利なしとは云ふべからず、大陸の旅行者が數々見る所の歐洲の葡萄園、成田の參詣者が多く見る所の千葉の梨子畑の如きは、其生作に、其培養に、其保護に、恰も慈母の赤子に於る如く、綿密、親切なる注意を要するものであるから、此等の生産を大仕掛にするときは、迚も所有主の手のみにては行届き難き、ゆへ、之が爲め耕夫を傭わねばならぬ、左れど雇人なるものは、固と定額の雇賃を受取る事が目的ゆへ、精々働いた處が傭主の好意を損ぜぬ樣に位のとにて、迚も雇主同樣の注意と勉强を以て働くとは覺束ない、故に之等は主人と家族と働き得る位の仕掛け、即ち小農こそ利益である。

第七章　生産の增加

土地、財本、及び勞力の生産力は、前に說來りしが、試み今一歩を進め、茲に一の國ありて、其土地は悉く最良の耕作を爲し、其勞力は尤も効驗ある樣に働き、其財本は尤も有益なる事業に用ひられてあると假定せよ、斯る國に於て、此上生產を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

土地ノ開作

増さんとおもへば、如何にすべきかといふに、唯此上土地と財本と勞力とを増すの外はない、土地を増すとは、土地の供給を増すとであつて、土地を開墾する事も亦其一手段である、多くの國においては、未だ鍬を入れた事のなき荒蕪の土地が澤山ある、なぜ此土地を耕さないかといへば、其土地を耕しても收獲がない、又多少の收獲があつても、肥代、手間代も揚らないから、手を着けずに捨てゝ置たに相違ない、然るに今此利益少き土地を開くといふには、左の條件がなくてはならぬ。

土地ノ開作ニ要スル條件

第一耕作上の改良、
第二需要の増加によつて産物の騰貴、
第三運輸の改良、

第一茲に十町の地面ありて、此地面は水に乏きとか、或は水害の多きとかの爲め、平均一町につき十石の米より收獲する事が出來ない、夫では手間賃にも、肥代にも足ないから、誰も手を着る者がなくして、荒はてた儘捨てゝおいた、然るに今疏水の道が開けた、或は堤を築ひて水害の憂がなくなつたから、今は十町に三十石の收獲を得る事が出來る樣になつた、そこで利益の見込が付たから、耕作を始めた、之れ即ち耕作上の改良によつて土地を開ひたのである、

第二又茲に十町の田地ありて、此田地は二十石の米を收獲する事が出來た、其當時米一石が四圓とすれば、其價は八十圓である、然るに此田地に要する肥料、租税、運賃、手間賃、等が八十圓以上を要するから、迚も利益の見込なしとて耕作を爲さなかつた、然るに世の中の進むに從つて、人口が殖る、其殖るのは實に驚べき程である、

人口ノ増殖

ヴイクトリヤにては三十年に七十二萬人殖た、英國は二十年間に四百五十萬人殖た、日本にても三千五百萬の同胞諸君と云ふたのは、ツイ此間の事であつたが、今は殆んど三千九百萬になつた、勿論之は以前の戸籍の勘定違ひから、多少の相違も出來た事もあらん、なれども兎に角人口が、日一日と殖る事は明かである、人口が殖れば之を養ふ所の食物

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

貴婦人方聽講ノ爲メ廣告

廣ク聽講員ヲ内外ニ募リ婦人方ノ爲メ來ル四月第一週ヨリ左ノ科目ニ付簡易英語講義會ヲ開キ候條望ノ御方ハ來ル二十五日限リ當館書記局ヘ御申入相成度聽講料一科ニ付金一圓二科以上ヲ兼ル者ハ一科ニ付五十錢宛ヲ增ス

一歷史　十回宛（一）　火曜日午後二時乃至四時
一物理學　十回宛（一）
一植物學及ハ衞生學　十回宛（一）　木曜日午後二時乃至四時
一化學　十回宛（一）

但右ノ三科ハ必要ニ應シ實地ノ試驗及通辨ヲ用ヒ說明ヲ加フ

明治廿二年三月　赤坂日付内

東京女學館

成立學舍女子部生徒募集廣告

幼年科、本科、高等科へ入學ヲ許ス志願者來月廿日迄ニ申込ベシ

授業●修身、禮式、和漢英、數學、地理、化學、文學、衞生、家政、經濟
課目●和洋（裁縫、音樂、圖畫、割烹）編物、押繪、唱歌、插花、茶湯

東京神田區駿河台袋町九番地
私立 **成立學舍女子部**

米國女教師イー、エム、ブラオン氏序文
米國女教師エー、ワイ、テウイス氏教授
日本神戸英和女學校生竹友僕代氏編纂

西洋編物秘訣

挿圖美本全一冊　特別實價三十錢

●右は毛糸編物法を畏り「レース」編製法にて未だ世に類なき故に歐風編物に志ある貴娘方必讀の書なり續々御購求をこふ

大賣捌所　大坂府東區備後町四丁目　**吉岡平助**

交詢案内

（催促する勿れ　郵券十錢送れ　委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十二　下婢　年齢廿歳より五十歳迄の基督信者を雇入度者あり

十五　召使　家内の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も基督信者[illegible]たき志あるものを望む

十六　召使　[illegible]小使の仕事及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり[illegible]官員の御内なり

十七　下婢　二十歳前後の給水の勞を取る下婢を雇ひたし商家にて家族五人仕事はひまなり月給は一圓以上

十八　下婢　年齢廿四五才にて裁縫[illegible]付き年給に[illegible]雇ひ入れたし但し[illegible]字等を閑暇の節は教授すべし[illegible]信徒ならば教會に行くも宗内同様にすべし

一九　召使　年齢十六七才の小間使及び年齢三十才より四十才迄のキリスト信者にして裁縫の出來る者を中働に雇ひ度處あり

●雇はれたき方（乙）

六　奉公　地方師範學校卒業生にて學費に困む者就ては或西洋人宅にて[illegible]入協力[illegible]雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七　裁縫　年齢廿三[illegible]にて家内の手助けとならんが爲め[illegible]に裁縫に雇はれ度きものあり[illegible]商家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば良いても[illegible]其他ハンケチーフのふち縫の如きにて[illegible]

十三　教師　栃木縣ケ子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にて教授に雇はれたきものあり可成くは鍋町か駿河台邊を望む

十四　洋行　身元確なる十八歳位のものにて英語少しも可なり出來るものにて學問研究の爲め官婦人の歸米に航せらるゝ御方の小間使ひとなりて洋行を願ひたし

一九　召使　裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督舍監留守居等の者に雇はれたし

二〇　裁縫　年齢十四五才にて華族様か或官員方の御方之内ニ小間使に雇はれたし且し餘暇に習字を授けくだされば給料は不申受

二四　奉公　年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし[illegible]の生れつきにて華族様か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は望み以上に願ひたし

二五　裁縫　裁縫は西も婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし

●喜びのめぐみ

十五　召使　乙第廿七號は牛込矢來町の某所へ雇はれたり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

附添看病婦募集廣告

本院に於て患者附添の看病婦備入候條左の各項に合當する志願者ハ本院事務室に申出べし

但給料及勤向等の儀ハ事務室に就き承合すべし

一 常に院内に宿泊する事を得る者

二 近易の文字を讀み及書き得る者

三 年齢滿二十五年以上五十年未滿の者

四 東京各區内に住居せる一家の戸主たる者一名の身元引受人ある者

明治二十二年三月

醫科大學 第一醫院

●●●速記彙報●●●

每月一回發行●●

第四冊 三月十一日發行●

價 郵税共一部金六錢 六部前金三十四錢

第四冊目口

●論說 ◉英國前外務大臣ロスベリー伯の萬國速記大會場に於ての演說筆記譯文 ◉法學士關直彥氏の速記法研究會員新年宴會に於ての演說筆記 ◉漢字と速記との關係を論じて速記者及び假名の會羅馬字會の會員諸君に質す 大民生 ◉地方に在りて速記術を講究せんとする者に告ぐ 五一居士

●雜記 ○○明治廿三年より開かるべき帝國議會の議事錄 ○官吏の演說と速記者の需用 ○東京府下の演說會 ○英博士の速記者に對する忠告 ○言語寫眞器と淡線記音學に就て ○速記文は面白きか面白く無きか ○法螺吹と速記者 ○批評 ○其他數作

●速記術講義 （第三冊の續き） 林茂淳 講述

◉（附言） ◎速記彙報第五冊は四月十一日に發行すべし

（發行） 東京神田區裏神保町一番地 速記彙報發行所

（大賣捌） 東京神田區裏神保町 敬業社

發兌					
三月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
四月	六日	十三日	二十日	廿七日	
五月	四日	十一日	十八日	廿五日	
六月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價

一冊。六錢 郵税。一錢 （但府内無郵税）

十冊。五十八錢郵税。十錢 （同前）

半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢

一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

一行一回 前金拾錢 （廿七字詰）

同三回以上 一割引

同六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。

但し廣告の不道德なる事物の廣告は謝絕す社會に無益なる物の廣告は無代價にて引受く女學に關係ある本誌に寄送の書籍は一部を送られ之を批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分以上の廣告を掲ぐる時は十部の作文を要し半頁分每に十部增の割合と定む

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町段々堂○同西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町[illegible]社多店
[illegible]

明治二十二年三月廿二日印刷

明治二十二年三月廿三日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8 Hiyoshichō, Shinbashi, Tōkyō, Japan.

WASON
HQ

女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

一冊六錢

當府内無郵税

明治二十二年（第百五拾五號）三月三十日發

社説
忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず

論説
婦人の王國（其四）（平岩恒保述）

批評
立志之礎○貴婦人會話篇

叢話
棄婦行（石橋忍月）○婚姻せざる可らざる乎○わかざくら（瓢夢）○旅のはぢ（むらさき）

小説
理想の紳士第九回（月の舎しのぶ）

寄書
和歌○日本の爲めに涙を流せ（佐々木笑受郎）

新報
四月○梅田千代女史死す○妻の財産と女權擴張、附り、獨逸國ミュンヘン府來報○當今の禁酒事業○何等の賄賂なるぞ○熊本人の大恥辱○音樂會○教育品展覽會○結婚媒妁の統計○其他數件

外報
ライルラルド孃自傳○メソヂスト女子傳道會○姦淫制止會○憲法及經濟學

附錄
婚姻試○女子讀本○女子生理

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY